

《翻 訳》

ジョン・プレブル

プレブル：＜ダリエンの大惨事（8）＞

渡 辺 邦 博：訳

本稿は、継続しているプレブルJohn Prebble: *The Darien Disaster*, 1968の翻訳、原著pp.178-216相当箇所の翻訳である。スコットランドからの入植者たちは、他国（スペイン）の介入に抗うこともできず、母国への帰還を果たすべく苦闘と苦悩を繰り返す物語も終盤を迎えた。本章の最後の文言をここに引くが、早速、その後に本文の翻訳を掲載する。「15カ月前にフォースの港を離れた5隻の船の中で、この船＜＝カレドニア号＞だけがスコットランドに戻った。船は少なくとも300名を運んだが、そのいくらかは船がクライド川に到着する前にこの世を去った。」。

ドルフィン号を失ったことに対する、評議員たちの反応はsplendidridiculous奇妙なものだった。あたかも彼らが、彼らの意思を押し通そうとする一艦隊と待機する大隊^{battalions}を伴った、＜p.179＞力強い国家の政府であるかのように、彼らは、彼らの恐るべき苛立ちのもとにある、その船とその乗組員たちの速やかな解放を要求した。

アリグザンダ・マギー¹中尉は、なぜなら当人はペニクックに言わせれば頭の切れる若い同僚^{fellow}だったが、この要求を携えてカルタヘナに派遣

1 Maghie 不詳。

された。彼は、3月11日にメイドストーン号に乗って（彼の出発は、評議員会でのいつもの議論によって遅れたのだったが）鼓手、名誉ある護衛とさらに休戦旗^{treaties}を携えて出発した。彼が持参した書簡においては、スペイン政府は、大ブリテンとスペインとの間で1670年の3月と7月に取り結ばれた、約条に注意を向けていたが、それによると、一国は相手国の諸権利と臣民たちを尊重する義務がある、となっていた。もしもドルフィン号とその乗組員たちが、解放されないのなら、またマギー氏にどんなことであれ侮辱を被ることがあったなら、カレドニアは、「陸海にある、軍事力によって、カトリック国王陛下の兵員たち、船舶積載物、財産や商品などを攻撃し、摂取、勾引することになろう」。

マギーは、返答を24時間待ち、その後はその有無に関わらず退去するように命じられていた。彼は10日後にこの植民地に戻ったが、彼のハイランドの血は、彼の母国の名誉と彼自身の自負心に対するいくばくかの恥辱のために燃えあがらされることになった。彼は、船べりでは鼓手が太鼓を叩き、船内^{prow}には休戦旗を掲げて、カヌーでカルタヘナに着岸した。兵士の一縦列が、総督の邸宅の方角に日光の中彼を引き立てると、総督とその補佐^{a file of governor council}が彼を受け入れる時間と意向を見つけるまで、控えの間で留め置かれた。ドン・ディエゴが書簡を開封して素早くそれに目を通し、報復と殺戮の筋道を感じて顔を顰め、それを床に投げた。それは、読まれないまま、マギーがその次に彼に手渡した法令の写しと、この会社^{Letter Patent}に与えられた特許状の複写と合体させられた。スコットランド人たちは、声を発するのができるようになった時の、ドン・ディエゴに言わせれば、ごろつきで、海賊、それに不貞な妻の夫だったから、彼はこれを牢獄に放り込むように番兵を呼んだ。兵士たちは、カルタヘナのスペイン軍の指揮者だった、ドン・マルチーノ・サバーレ^{Saballe}²が丁重にマギー

2 Saballe 不詳。

を取りなし、その晩その少年の故郷で滞在できるよう、この総督の出発を要請した。ドン・ディエゴは不承不承であったが同意した。

デ・サバーレは、^{k i n d l y}さっぱりした人物、あるいは、総督以上におそらく^{subtle}は狡猾であった。彼はマギーのきびきびした勇氣に印象づけられ、彼らの唯一の共通語であったラテン語で彼と会話を行なった。彼は、もしもスコットランド人たちがドルフィン号の荷（彼はスペイン人たちが＜p.180＞引き揚げたのを認めようとはしなかったが）の返還を固執しないなら、彼がこの乗組員の解放を総督に説得してもよいと仄かしていた。しかしながら、朝になると、ドン・ディエゴの気分がよくなり、ピンカートンとその部下たちに会見するというマギーの義理がたいが、機転のきかない要求により、悪化してしまった。彼らが会見できなかっただけでなく、国王陛下のご意向に叶うまで彼らは拘禁状態となるだろうと、この総督は叫んだ。それにとどまらず、彼の兵士たちは、^{better}もっとマシな条件に置かれることになった。——これには疑いもなく、デ・サバーレに対する^{resentful}不愉快な眼が伴ったが。というのも、彼は遠い昔にスコットランド人たちがダリエンから追い立てたことがあっただろうから。しかし、彼らの現在の^{security}安全状態からするとそれほど大きな快適が得られる訳もなかった。マギーの報告によれば、彼は、「速やかに陸海の軍備をかき集め、一撃でわれわれをこの場所から根こそぎにする」と、すっかり決意を固めていた。少なくとも、この若きハイランダーは立ち去るのを許されたので、それに対して彼はおそらくデ・サバーレに感謝しただろう。カルタヘナ港には、ベンボウの^{West Indies Fleet}西インド諸島艦隊の旗艦だけでなく3隻が停泊しており、メイドストーン号が出帆する前に、マギーはこの艦隊司令長官に^{courtesy call}表敬訪問を行った。ジョン・ベンボウは、このスコットランド人たちについてロンドンから何の指令もまだ受け取っておらず、スペインの^{feathers}小者たちを怒らせるべき理由などは、とりわけこの場合には彼らスペイン人たちにニグロ奴隷と

いう荷物を売り払う時だったから、何もわきまえてはいなかった。だが、彼はその荒れ狂った訪問者に対しても礼儀正しく、マギーがお守りのように携えてきたこの会社の法令に失礼のないように目を通し、この会社に寛大な好意を見せた。彼は、その船にその従者たちを一人として煩わせるつもりはなく、ドルフィン号の乗組員たちのために彼ができることはすべてする所存だと、告げた。「私が舷側を越えるような場合には、われわれの前に大きな機会が開かれると彼は述べて、われわれに、財宝というものは常にその船倉に好意を示すのだということを覚えておくようにと述べた」。このことは総じてただ、マギーを混乱させただけであった。彼がデ・サバーレから言われてきたことは、ベンボウが、イングランド国王によるスコットランド植民地を認めず、その支援とか防衛の意思はないとのことを、この総督に確信させてきたということであった。

評議員たちは今や、この総督の無礼に甘んじるか、彼らが行ったおどしに敬意を表するかを選択する時となった。驚くべきことに、エフライム・ピグリントン³は、スペインの積み込みに対する報復攻撃に際してメイドストーン号^{Letters of Mark}を撤収するように求められた。^{President}長官としてのジョリーの署名入りの、免許状⁴は、魅力十分であった。つまり、彼のスループ船の貸し出しに対して戦利品全体の12<%?>、2.5<%>が当人自身に、重傷を負った乗組員の誰に対しても8から6名の奴隷につき600セント、すべての収穫物のうち3つに1つの選択^{choice}。軍艦は一隻としてなく、<p.181>カレドニア湾のピルグリントンには、ほとんど利益はなかったが、彼は承諾した。彼はその次の順風に乗り、捕獲品はなく、沈没船もなく、何の送致^{saw}もなく、出発し、数日のうちにこの港に戻った。

3 Pilkington, Ephraim 不詳。

4 letter of marque、他国商船拿捕免許状。

マギーの帰還の唯一の慰めは、メイドストーン号が、カーリット湾の東の沿岸で見失った、ニュー・イングランドのブリガンチン⁵を曳航したことだった。これは、ニュー・ヨークのスコットランド人同調者たち⁶が装備し、ダリエンにおける彼らの同国人たちのために、塩漬けタイセイヨウサバ、バターと小麦などを準備して、積み込んだ、The Three Sisters 3人姉妹号であった。この不足気味のくささやかな、わずかな積荷は、数日間以上はもちそうにはなかったが、彼らが忘れ去られてはないとの認識は、しばらくの間、開拓者たちの魂を高揚させた。今や、この港湾ないしは黄金島の沖合に投錨する交易スloop船^{trading-sloops}が数隻あった。ムーンとウィルモット⁷がネプチューン号と呼ばれた一隻で帰還し、彼らとともにマサイアス・モルトマン⁸に指揮された別の船がいた。彼らはそれでも彼らの食糧のためにだけ金銭を要求したが、まじめで分別ある者たちは、goods 現物での受け取りということを彼らに説得した。今となつては、評議員会にはその種の人間が皆無となり、パタースンですら、怒りっぽく、揚げ足をとり、幻滅を感じさせるようになった。ベニクックはプランデーを飲んでしつこい病氣と闘ったが、彼の気性はズタズタとなり、彼の精神は猜疑心で暗澹たるものとなった。彼はムーンとほとんど一触即発で喧嘩し、最近の訪問の折の植民者たちの一人であり、スケルトンと呼ばれたホームシックの少年を連れ去ったことで彼をとがめた。彼はムーンのボートの一つを押さえ、その少年が戻るまで、船とその乗組員を留めおくと宣言した。その次に白熱の口論があつて、ボートが、戦地間を行き交う密偵のような最後通帳を携えて、その港湾をあちこち行き交った。陸上では、入植者たちが困惑顔の冷淡さで、この悲喜劇を眺めたが、彼らの皮膚は黄味を帯び、船中にある良質な食物の不足

5 brigantine 二本マストの帆船。

6 sympathisers

7 ウィルモット、不詳。

8 モルトマン、不詳。

が原因でざらざらしていた。パターソンは、勢力の内部撞着に訴え、ムーンにはその少年に見切りをつけること、ペニクックには陳謝で満足することを説得した。それですべては終わり、彼は述べた、「弱いものいじめとビリングズゲイト⁹で」。

しかし、それで終わりではなかった。数日間熱があつて病床にあったダニエル・マッカイが、こうなると、血氣盛んな顔で、議長^{President}として担当の週のためにこの評議会に戻ってきた。なおもひどく興奮して、彼は、モルツマンのスループ船が、スペインの命令のもとで航行を継続しており、あまつさえこのときに3名のスペイン人たちがその船に乗船していたことと述べ立てた。彼は、ピンカートンの投獄と若きマギーに対する耐え難い侮辱への報復として、<p.182>ロバート・ドラモンドがその船舶、その船長と乗組員の逮捕にあたることを権威づけるための命令に対して評議員たちの署名を要求した。パターソンが抗議した時、マッカイは怒って彼の方を向いた。「私はあなたが干渉しないのを確信する」、と彼は叫んだ。「なぜなら、あなたの友人のウィルモット¹⁰が関係しているからだ」。パターソンは折れて、不承不承ながらその命令に署名した。ドラモンドのボートがカレドニアから去った。剣も、マスケット銃もピストルなども大層には見せずに。彼らが見つけることができたのは、スペインの命令ではなく、ただ、そのスループ船が実のところジャマイカのものであるのを示めしただけの書類だけであった。しかしながら、その船倉に隠されて、モルツマンがボルトベロに搬送していた2名の怒り狂ったスペイン人乗客がいたのだった。ドラモンドは、彼がモルツマンの船室で発見した8セント硬貨^{The Three Sisters}で100ドルと共に、その者たちを意気揚々と救済した。評議会は、3人姉妹^{The Three Sisters}の船長に、タイセイヨウサバやバターに支払うのに使う、資金を計上し認めたが、パタース

9 Billingsgate は、テムズ北岸のロンドン最大の魚市場。

10 See BBC・Pronouncing Dictionary, Willmott.

ンは惨めなことに不満であった。

「私はこの件につき母国に書簡を書こう、そして彼らと袂を分かつとの意見だ。神はご照覧である。私の関心事は、私自身の評価でも、私自身の気分についてでもなく、正義を真に愛することと、この植民地の幸福にあることを。」。

この細やかな海賊行為に対しては、弁明が必要だろうと理解しつつ、ペニクックは、モルツマンの乗組員たちが「野蛮な輩の一群」^{barbarous parcel}だったと述べた。彼らは近頃カルタヘナの風下にあるスペインの島を急襲し、その独房に裕福な修道士を捕虜にして、彼をむち打ち、その血がその顔で黒くなるまでその人間を逆さ吊りに^{leeward}11した。そのことは事実であっただろうが、モルツマンがスペインの指令のもとで航行していたという主張はほとんど支持されなかった。

ニュー・エディンバラの朽ち果てつつある小屋の波打ち際には、恐怖が増加していた。「われわれの兵士たちは、日を越す度に一層弱く、ますます病的になり続けるだけでなく」、とパターソンは言った。「それ以上に何の回復^{recovery}の見込みもなかった」。3月のはじめまでに、墓地には200の墓があったが、今ではある場合には<時には>1日に10から12基の新たなものが掘られた。サミュエル・ヴェッチの仲間内には、23名のジェントルマン志願者（兵）がいたが、その中で、ロジャ・オズワルドだけが、生き残ることになった。ボロボロの緋色の服を纏った陰気な生存者^{yellow}たちは、驚いたように^{with surprise}毎日の日の出を眺めても、決して彼らの砦についての説明もできず、彼らの仲間がそれを失ったことを理解することもできなかった。ひとりの船医^{surgeon}であったヘリス¹²は、ハミルトンと出発していた。

11 by the heels、齋藤『熟語本位英和中辞典』、足枷をつける。拘禁する。

12 たたひひとりの gentlemen 良家の、職を離れた？<志願兵（者？）として第一次遠征隊に参加、生き残ったが、父親からは勘当される。彼の手紙はダリエンでの生活の生き生きとした説明を含む。P

13 Livingstone, Andrew 不詳。

もう一人は、アンドルー・リヴィングストン¹³で、ドルフィン号と共に捕虜になっていたが、ひとりの男は、ヘクター・マッケンジ¹⁴とその働きすぎの助手が、彼が病気だと報告できる前に、現に病気に罹り、死亡する可能性もあった<p.183>望みうる最良のところは、その友人がその人のために墓穴を掘ってくれるほど壮健であるとか、彼が弔らわれない状態で放置されず、その遺体が、給水船water-boatsが母船に戻ってきた時にこの港湾に投げ入れられることであった。こうなるとは、くる日も来る日も、混乱の極みとなったこの植民地を弱体化させ、衰えさせたのは、数えきれない熱帯性の熱病のどれだったのかを知る術がない。次の年に第二次遠征隊を持ってこの救援に一隻を手配したかもしれない、パトリック・マクダウェル¹⁵は、彼が乗り切った病について冷静なc l i n i c a l(臨床上の)説明を書いた。

それは非常にひどい、斑点熱spotted feverで、わたしの全身は、すっかり真赤であった。私の窮状は最悪で、私の手首や足首のまわりのいくつかの箇所はすべて赤かった。しかし、すべては痒みも炎症も、皮膚の上に何らかの種類の腫れ物exturbanceもない状態であった。私の味覚は、hellish vicious b a d i n t o l e r a b l e最悪で、ひどく、役に立たず、耐えられない状態で、私が口にしたもの何かもが、想像を絶するほど嫌なものでした。最初の頃、私は異常な吐き気vomittingがして、その結果お湯を飲むと、私は何か黄色く、苦い成分をもどすと、不愉快な胆汁質の成分もそうすることで、大変楽になりました。私は4日ないしは5日間非常に具合が悪い状態を続けました。私はそれと共に、激しい頭痛、眼球の痛み、関節と骨格全てに疲労感wearinessがあり、それを四六時中私は患いました。

14 Mackenzie, Hector 不詳。

15 救援船マーグレット号の積載監督者。ジャマイカで第二次遠征隊の生存者を発見、バタースンの友人。日誌を作成した。Prebble による。

病状が続くといつでも大変気が遠くなる傾向があつて、そのあとかなりの間、私は極度に体力がなくなり、今でも一人で歩くことができないほどです。病状がある時に、私は首筋に^{blistering plasters}ヒリヒリする膏薬を、こめかみには別の膏薬を塗っており、両方ともとても具合が良かったのですが、私たちの医師は、両方かどちらかをしてくれるようお願いしても、瀉血でもなければ、嘔吐をさせようともしませんでした。

少数の人たちは、彼らがスコットランドから持ってきた希望や熱情に忠実な状態であった。ロバート・ターンプル^{Lieutenant}16中尉は、飢餓も失望も根絶できると言う^{devotion}信念によって、この土地にぞっこんとなった。^{as late as April}4月になつてもまだ、彼はその友人カーノックのアースキン^{hyperbole}17に、意匠をこらした誇張の言葉で、書き送った。ダリエンは、もぎ取る苦労もなく樹木から果実が落ちて、おとなしい鹿が生息する広大な森があり、< p.184>鮮やかな羽を持つ鳥たちが、銀色の鱗のある魚の住む川の上の夕の空気を爽やかにする、緑なす楽園であつた。彼はこの植民地のことに確信を持っていた。彼は、これ<植民地>を成功させるであろう、「信頼できる（誠実な）評議員たち」、つまり彼の友人たちのトマス・ドラモンドやサミュエル・ヴェッチのような人たちを、待ち望んでいた。彼は、カーノックに、この会社が、魚釣り用の網、気の利いた（適当な）作業用具類、もっと多くの湯沸かし、熱帯向けの衣服用の粗い^{coarse harn}ハーン、「この国ではそれらを焼いてしまうので」たくさんの靴など送るように、うるさく催促した。そして、もしも女性が来なくてはならないながら、彼女たちは、料理、洗濯、病人の看護の仕方の知識がある者でなくてはならない。

16 Turnbull, Robert 不詳。

17 Erskine of Carnock 不詳。

しかし、入植者たちのほとんどが、ずっと昔に、地面や植民地に懐いたかも知れない^{interest}意欲を失ってしまった。ロジャ・オズワルドと同様に、ただただ、生き残り、立ち去り、故郷へと戻ることを彼らは望んだのだった。ラナクシャの彼の厳しい父親を恐れて、オズワルドは彼にこの惨状と絶望とを告げることができなかった。その代わり彼は、エディンバラの物書きだった従兄弟のトマス・エイクマン¹⁸に、彼が不屈の父親だったことを説明するとの希望を持って、手紙を書いた。彼の言うには、彼は赤貧洗うがごとし状態で、他の者たちの大多数と同じく、こうなると、それ以上の食糧を購う手段も財力もなくなっていたのだった。

^{The Three Sisters}
三人姉妹号から買い求めた塩漬け大西洋サバ<マカロウル>や、エドワード・サンズが捕獲して、各々100ポンドを5切れ8<ポンド>で販売する亀が始まると、ペニクックにとっての「幸福な時間」になった。しかしながら、通常の入植者や志願者たちのうちで、この幸福を共有できるものはわずかだと思われた。彼らは1週間に2ポンドの小麦を常食にしていた¹⁹。オズワルドの言うには、この会社の計量による2ポンドとは、わずか1ポンドを意味するに過ぎなかったし、「もしもうまくやりくり算段したとしても、同じ物から、かび臭いウジ、サナダムシそれに、その他同様のシロモノを1ポンドの1/4は掴むことになる」。本当に稀な場合に支給されることがあっても、その牛肉は、「私の足のウラのように真っ黒で、腐った長靴の切れ端のようにボロボロ」であった。時には、一握りの干した豆が、日割りの手当²⁰としてとして、5人に分配されたこともあった。「他に何ひとつなく、わずかな水で沸騰され<茹でられ>た時、大ぶりのウジ虫やサナダムシが、まるで浮アワが鍋からとり去られるかのように、スープの表面から掬い取られなくてはなら

18 BBCによると、エイクマンと発音する。

19 齋藤 live on、常食にする。

20 daily allowance、手当て。

なかった」。

要するに、閣下、ひとりの人間が、その1週間分の支給量全部を、容易く1日で平らげますし、胃袋はたった一つという訳でもありません……けれども、このわずかな支給のためですら、手斧^{hatchet}、手押し車^{pick-axe}、つるはし^{forehammer}、シャベル、げんのう、ないしは事情によっては、その他の道具類でもあれば、日中に働くべく日々出向いて行くのは誰でもです（彼がそれほど虚弱でないとしてですが）。<p.185>そして、12時まで継続します。さらにその後2時まで、そして夜まで、時には、塹壕^{trenches}の水の中で半ズボンのヘッドバンド^{breeches headband}のところに來るほどで、一日中働きました。私の肩は、荷物の運搬でクタクタになって、皮膚は剥がれ、腫れ物だらけになりました。もしも誰かが病気になって、その中に止まらざるをえないとしても、その日彼には食^{victuals}べ物が一切ありませんでした。われわれの評議員たちは、四六時中気楽に横たわり、時には派閥^{factions}に分かれて、それぞれの利害に動揺^{the public ruined}させられ、人々を破滅させたのでした。

少なくとも、トマス・ドラモンドは、こうしたやり方で半分飢えて、病気のような人々を労働に酷使しながら、彼らの仕事は無駄にされなかったと主張した。4月の初めまでには、この砦^{palisades}の矢来が完成させられ、その銃眼^{thirty guns}に30挺が配備された。この場所の上の砲台^{land batteries}には20以上が持ち込まれた。この半島の細長い部分を横切^{dragged up to}って、深さ20フィート、幅が25フィートの大きな溝^{ditch}が開削された。それにしても、これは5ヶ月間に全て行われたものだった。土地の分割があった訳でも、農園に播種されたとか、交易が確立したとか、財貨が贖われたとか、重要な街が建設された訳でもなく、議会の選出が行われたとかでもなく、5名からなる口論する者たちからなる、もてあそびのルールだけしかない政府があったに過ぎない。評議員たちは、この入植地を重視することも信頼するこ

ともはやなかった。オズワルドは、彼らのことを「最上の指導者たち」^{ドージェ Doges}と呼んだが、おそらくは世間によくあるからかいを繰り返したのだった。彼がエディンバラを離れた時には、ロバート・ジョリーによる防御の下に置かれていたが、「彼が私の父親に大きなことを約束したとは言え、私は彼に借りがある小物などでは決してなかった」。この手落ちよりも悪いことに、ジョリーは、彼からワラジ虫^{sow→とるに足りないもの}と四人の騙されやすい人々を引き受けたが、それによる損失について彼は、飢餓の折に、いやというほど思い起こすことになった。

オズワルドは、一体なぜ^{should}神^{the Almighty}が彼に命を賜り、それでいて他の者たちからそれを奪われるのか理解してはいなかったが、この神のお恵に対して神をたたえ、感謝した。「私は人生を生きながらえはしたが、健康を保った訳ではなかった。私はほとんど毎日のようにうやを漏らした熱^{raved}と悪寒に苦しみ、その結果、とても衰え、両方の足では自分を支えられないほどになってしまった……われわれの体が痩せ衰え、そのような糧食と苦しい仕事によって途方もなくやつれてしまったので、自分たちは夥しい骨と皮だけのようにってしまった」。

酔っ払いが増えても、蒸留酒やワインの不足はなかったので、抜け目のない者なら望むものならなんでも手に入れることができた。薬はわずかで、慰めは十分であったが、自殺は有り余るほどだった。＜p.186＞評議員会は賄賂としてブランデーを放出^{issue}＜支給＞したが、時にそれが与えられるただ一つの報酬^{reward}のこともあった。3月の末までに、髭をたたえ、消耗した一人の白人が、インディアンの一団によってこの植民地に連行されたが、ままあってスコットランド人たちは、この彼ら自身の体つきからすれば恐るべき風刺画^{caricature}が、ドルフィン号と共に出航した船医の、アンドルー・リヴィングストンであるに気がついた。彼がいかにしてカルタヘナから逃れ、旅程を辿って来たか、誰も記録していないし、おそらく彼のうろたえた頭では何も記憶できてはいなかったが、彼の勇

気の功により、彼は、「彼自身に相応しい働きと、^{in recognition of}加えて質の悪い割当として」4ガロンのブランデーが与えられていた。ワインとブランデーとが、一時的な麻痺状態^{s t u p o r}という恩恵を保証はしたし、中には死^{oblivion}というものへの平和な横滑り^{p e a c e f u l s l i d e}でもあったろうが、パターソンは、植民地の人々全体に節制を説得した努力には、ほとんど成功しなかった。彼は、支給物の価格がこの会社の帳簿上^{c r e d i t s}の貸方に記載されるのを約束したが、ただ一人、ゴードン^{officer}²¹と呼ばれる役人が、その申し入れを受け入れただけだった。彼は何年も後になっても、この金額の請求をし続けた。

この植民地への敵意が鬱屈^{s a m o u l d i n g}していることに直面して、さらにそれが反乱の炎に暴発する前に鎮められなければならぬと気がついて^{a w a r e}、評議員たちは、ついに彼らの人数^{n u m b e r s}を増加させることに決めた。ただ、この決定ですら、口論や不機嫌をなくすることはなかった。当人以外の誰もが彼がその命を奪ばわれると考えた熱病から、回復したダニエル・マックイは、評議員会では口煩く活動していたが、彼が（ほとんど説得の必要はなかった）パターソンや（かなり必要だったに相違ない）ペニクックを説得して、この評議員会に4名の新メンバーを指名するとの動議^{m o t i o n}を画策し、助成したのは、議長としての彼の担当週の間であった。マックイの示唆は、利害を超えたものではなかった。^{The Three Sisters}三人姉妹号は、スコットランド向け書簡類を携えて可能な限り速やかに出発することがすでに決められており、マックイは、その携行を願っていたが、彼らの数が非常に少なかった^{w h i l e}ので、評議員たちの中から一名が赴くことは賢明とはされなかったのだろう。増員のこの動議がパターソンによって提示^{p r e s e n t}された時、ジェイムズ・モントゴメリーは釈明もなく異議を申し立て、立腹して立ち去った。ロバート・ジョリーも、人員が少なければ政府のゆとりが大きい^{r u l e}し、その統治も一層賢明となるとか曖昧な論理を主張して、反対を

21 Gordon 不詳。

した。さらに、評議員たちの誰も、この植民地がうまく樹立され、繁栄するまでは俸給を受け取らないだろうから、この会社に過剰な出費に関わらせることは適当でないとした。こんな詭弁には誰ひとり支持が得られず、彼もまた引き下がった。＜p.187＞「われわれは、われわれの秘書官たちをいく度か派遣したが」とパターソンは述べた、「その場合でも、評議員会への彼らの出席と援助を認めるよう、友好的かつ敬意を表するやり方で、彼らに嘆願したのだが、それでも彼らは拒否して、われわれを完全に見放した」、と。彼らは両名とも、この植民地にあいそが尽き、母国に戻るのを望んだのだった。

法に適うかは疑わしかったが、残りの3名が自らこの^{motion}動議に賛意の投票をした。新たな人たちはおそらくパターソンにより示唆された者たちで、彼らが彼の^{last}究極の人物を目の当たりにするのを望んだと知ったマックイに了承されたが、絶望的にベニクックによって絶望的に拒絶された。彼らは全員が士官^{officers}たちで、トマス・ドラモンド、チャールズ・フォーブズ²²、コリン・キャンブル²³だった。グレンコウ一味が今やこの評議員会を支配したのだったが、^{comrade-in-arms}モントゴメリーは、かつてはフォート・ウィリアムでの戦友で、この植民地での彼らの派閥の一員であったが、この評議員会にやってこようとしなかった。彼はおそらく彼らのことに嫉妬心を持っており、彼らの赤い上着の光の前では、彼の^{battle-honour}ささやかな軍功が色あせるのを快く思わなかったのだろう。

人員の増加はこの評議員会にいささかも調和をもたらさなかった。ヴェッチによる支持を受けて、トマス・ドラモンドはパターソンに対する軽蔑を隠さず、自らの兄弟によるベニクックに対する憎悪の手先となった。彼らは、仲間の飢餓状態にある者たちの状態にひどく関心をもってはいたが、フォーブズとキャンブルとは論争や管理統制に至って

²² Charles Forbes 不詳。

²³ Colin Campbell 不詳。

は何ら手腕もなく、彼らのこの評議員会に対する唯一の価値（意味）は、彼らの出席＜存在＞が入植者たちの尊敬をいささかでも取り戻したことであった。彼がドラモンドたちとの公然たる^{breach}仲違いを生き延びることができたかどうかは定かでなかったが、ペニクックはマッカイとの^{quarrel}喧嘩を開始した。指揮官は、あらゆる者たちを、「勇敢な少年と向こう見ず」、あるいは「無骨な、（でくの坊の）ゴロツキと^{rascals}ヤクザ者」に分割し、最近ではあのハイランダーたちを、第一から第二の部類に移した。彼は、マッカイがかつてある種の子供じみた論争の時、彼に反対するピンカーターの側にいたこと、別の癩に障る状況にあって彼にジョリーに詫びを入れて、でくの坊のゴロツキを晩飯に招待したことを覚えていた。エフライム・ピルキントンがスペイン人たちを迎撃する虚しい巡航からメイドストーンを連れ戻った時、ペニクックはこの評議員会に、彼＜ピルキントン？＞が報復の考えに反対し、マッカイがそれに熱心に支持をしたことを、蒸し返した。彼は毎日のように、この病気の人間を^{badgered}困らせ、悪口雑言に時間を浪費した。彼は、マッカイがこの会社に急送便を運ぶという動議に反対し、この投票が彼に対立するに相違なく、彼がエディンバラにおいては、執拗な敵に遭遇するだろうから、彼が恥知らずなことに、別便を仕立てて、乗り込むのだと考えていた。＜p.188＞彼は、マッカイの病床を、上機嫌を振りまきながら訪れ、もしもマッカイがイングランドを通過して帰国するなら一日1ギニーが支払われるし、さらにスコットランド滞在中のすべての費用を引き受けるとの要求のある理事会向けの推薦状を彼に迫った。マッカイは、冷笑しつつこの書状を受け入れ、彼らの不自然な友好関係が復活した。のちに、彼らの間の一層暗澹たる盟約となる疑惑が存在することになった。

今や評議員会は定期的に海岸で、パターソンの小屋か、役員たち共有^{officers}の小屋で開催された。彼らはその開放的な壁を通して目撃され、カツラ

を外し、上着を緩め、空気中には虫たちの大群を追い払うタバコの煙が充満していた。ロウズ氏のペンが、書類を書き殴り、叫び声による騒音があった。この湾の海水際や船の船室の閉ざされた扉からからそう離れてないところで、彼らは8月という優位を失い、過ぎ去ったことを、妬み、喧嘩ばかりして、人間らしいことどもを、噛み締め、耳にしたのだった。この植民地で不満が増長するにつれ、これによって入植者たちや船員たちを、ギリギリの忍耐力や、悲しいことに失敗に帰した反乱^{mutiny}という帰結に駆り立てることとなった、いくつかの、一見すると相互に関係のない偶発的な事件の一つが起こった。

この評議員会に彼らの役員^{officers}たちが出席したことによって刺激され、入植者のいく人かが、小屋の入り口に希望を持って駆けつけ、もっと多くの食糧を要求した。もしも彼らの劣悪な割り当てが増加されないなら、と彼らは口にした、この植民地は放棄されることになる、と。ペニクックは彼らに対して穏やかに、船には1ヶ月分の貯蔵<糧食>しかないの、撤退のために彼らに与えるには十分でない、と。彼はこの提案を受け入れるのを拒否し、これはその他の評議員たちによっても支持されたので、貯蔵分がセイント・アンドルー号から荷揚げされ、砦に収蔵されるべきことになったが、ロバート・ドラモンドは、カレドニア号からの荷下ろしすることは一切まかりならんと硬く信じていた。入植者たちは死刑宣告のような調子に混乱して逃げ去ったが、指揮官^{Comodore}の返答を耳にしたロバート・ジョリーが、陰鬱な待避所から現れ、病人たちに取り置いたオートミールは除いても、現在の支給状況でなら3ヶ月分相当の十分な食料があると述べると、彼らはさらに怒り狂った。

提督^{Comimodore}がこれを否定すると、誰ひとり彼に、彼の船上にあった在庫の放出を説得できなかった。彼の行動は終始一貫、奇妙であった。船員たちはセイント・アンドルー号の水樽を一杯にしていたが、<p.189>彼<提督>が錨を揚げ、出発して、この植民地を飢えさせるとのうわさが急

速に広まった。ロバート・ドラモンドはこれを信じ、自らの安全と同じ
関心から、カレドニア号の水桶を一杯にして、この船の航海準備を整え
た。双方の船が底荷^{vessels bilast}を積み込み始めると、エンデヴァー号のジョン・ア
ンダースン²⁴が、急いでそれに追隨した。陸上では、入植者たちがビッ
クリ仰天したが、評議員会は何もしなかった。

「この時あたりに」、ジョリーはその回想記^{memorial}に書いた。「ペニクック
大佐^{Captain}はその最良にして最も信頼できる友人たちのいく人かを船上に招待
し、その者たちに対して、夕食後に、食糧が使い果たされ、船も破壊さ
れようとするのを見ると、しかるべき人員がおり、食糧も調達された状
態のセント・アンドルー号とカレドニア号が、その計画^{fit out for a design}に充てられるの
が最も当を得たものだというのが彼の考えだと、彼は提案した」。この
計画とは、私掠船^{privateering cruise}として巡航を行うことが含まれていたが、最良にして
最も信頼に値する友人たちにとっては・・・そしてそれを耳にした時
の入植者たちの残りの者たちにとっては・・・それは、逃亡^{desertion}＜遺棄＞す
なわち尻込み^{cowardice}のように響いた。ペニクックは、慌ただしくこの意見^{suggestion}を撤
回して、彼はただこの植民地によかれと考えているだけだと申し立て
た。この問題^{affairs}は、士気^{morale}にとっては逆の効果を持った。「この植民地の最
大多數が」、とジョリーは言った。「新兵を募ったり、スコットランド
からの情報を得る前にこの地を放棄するよりも、それを絶対に望んだの
であって、出帆する位なら、4分の1ないしは3分の1で満足であって、
通常の糧食の支給が半分に減額されてもよいのです」。それは、誓約^{noble dclaration}と
いう気高い宣言ではあったが、耐えることが決して容易ではない飢餓を
生み出したのだった。

病気や極貧に対する幾ばくかの懸念を示したただ一人の船長^{sea-captain}はウィリ
アム・マードク²⁵で、ピンカートンの最初の盟友だったが、その人物が

24 Anderson, John 不詳。

25 William Murdoch、不詳。

今やユニコーン号を指揮していた。その他の者たちが水や底荷^{バラスト}を積み込んでいた時、彼は、船内^{yards}を空にして、船舶に修理に備えるよう命じたが、それは、陸上にある面々に、彼が彼らを見捨てる気はないのを理解するとの希望を持つてのことだった。彼とその部下^{c r e w}たちは、彼らの小舟を亀の探索に起用するのを申し出たし、それ以外の船舶にも彼らに合流するよう募ったが、ジョリーによれば、彼らは、「フランス人の難破船を漁り、彼らのより合わせた網で小さな魚を捕まえるのに忙しく、自分たちだけのために捕獲したものすべてを専有したのだった」。ユニコーン号の小舟はとりわけ運がよく、時には夕暮れ時に12頭かそれ以上の亀を捕まえてもどり、それだけでこの半島の100名の人間を食べさせるのに十分なくらいであった。

<p.190>マードックは、大雑把^{rough}な正直^{integrity}さの持ち主で、彼の「誠実なピンカートン大佐^{Captain}こそが」、彼の船とこの植民地にとって最善^{honest}と考えるであろうことを行う確固たる意志の持ち主なのであった。「私は、虫の好かない会社の利害を守る立場にあった」と、彼は7ヶ月後に誇らしげに書いており、「彼らの構成員^{m e m b e r s}たちのほとんどがそれを行う気迫を持つてはいなかった時、彼らのグレンコウ評議会を相手にこの職員たちを援助する立場にあった」。彼は、今やユニコーン号に乗船しているジョリー、さらにモントゴメリーに同情的で、両名が評議会から公式に追放された時には、弁護というよりも寛大さをもっと持って、彼らが公正でない扱いをされてきたと、周りを意に介さず明言していた。彼は、「世界はその威厳に耳をかすべきだ」という、比類^{s o l e}のない野望を持つ者だと、彼には考えられたベニクックをひどく嫌っていた。彼はカニンガムのことを「接客^{g r e e t i n g}する獣」だと呼び、今では、母国に速達便^{dispatches}を運びたいというマッカイの願望を耳にして、ハイランダーたちの「馬鹿げた腹^{s t o m a c h}の中(魂胆)」に対する彼の軽蔑を隠そうとはしなかった。当然のことながら、彼は自らの乗組員たちだけと、陸上の陽気な入植者^{grateful}たちには人気

あった。彼がこの反乱に無邪気にも関わったことは、彼にとっても災難で、彼のこの植民地に対する忠節な奉仕も終わらせることとなった。

彼は、彼が彼の亀を捕獲する小舟で帰還したある晩に、それを耳にした。ジョン・アンダースン²⁶とワインを1グラスを飲もうとエンデヴァー号に乗り込もうとして、彼はその主人^{master}が警告を受け、困ったことになったのを見つけた。ペニクックの部下^{officers}たちの一人で、アンダースンなる者が、その日、セイント・アンドルー号に、抜身の剣や撃鉄を起した拳銃を携えて乗り込み、海賊行為をする巡航船に向かってその船を出帆させるとの計画を携えて、彼に近づいた。アンダースンは、その企て^{plot}に加わるのをよしとせず、この船員^{officer}（その名前を言おうとはしなかったが）を叱責したが、おそらくは、ペニクックが何らかの形で関わっていると考えて、この評議会に知らせるのには乗り気でなかった。「私は、それを隠すことは危険だと彼に言った」とマードックは書いた。「さらに、ジョリー船長にそれを明らかにする機会があれば、直ちに乗船することを告げて、それを行った」。ジョリーは彼にしかるべく監視を続けるように忠告し、さらにもしも別の船舶のどれかがこの湾を離れるようなことがあれば、ユニコーン号^{guns}の銃器によってそれに対する射撃を開始しなければならぬと、付言した。彼自身の覚書によると、ジョリーはそれから、モントゴメリーとパターソンにこの計画^{plot}を知らせたが、パターソンの署名もあったこの評議会の報告には、彼がその情報を秘匿し続けたとあった。おそらく彼は、この反乱が失敗すれば、ペニクックは倒され、失脚させられるとの抜け目ない希望^{machiavellian}を持っていたのかもしれない。

数日後、この評議員会は、マードックに、<p.191>修理のためユニコーン号を引き揚げ、砦内に乗組員たち全員を上陸させるように命じた。彼自身その船を修理する積もりはあったのだが、彼は、このため彼

²⁶ Anderson, John 不詳。

は、セイント・アンドルー号が出港できなくなる成り行きになるに相違ない^{sense}と決断した。彼の義務ということに対する頑な感覚は、グレンコウ一味ではあっても、この植民地のただ一つの政府というものに対する敬意であって、彼が命令を拒否するのを許さなかった。その代わり彼は指揮権を断念して、この評議会に対して、自分がもはやそれに服することはないと告げた。彼は、メイドストーン号か、3人姉妹号の、いずれにせよ最初に出港するどちらかでスコットランドに向けて出発する許可を求めた。ジョリーとモントゴメリとは、陸上での安全を危惧して、すでにピンカートンの船に乗っていた。

その週の議長^{President}は、ダニエル・マックアイで、日曜日にマードックを朝食に招待したものの、彼にそれを袖にされた。その次に夕食への招待があったが、彼が他の客人たちのすべてがハイランダーズ部族の一員たちだったのを知った時、再び彼はそれを拒否した。彼はマックアイに^{lost his temper}腹を立て、ゴマスリしようが、威張り散らそうが、彼の考えを変えることはない^{sauce}と述べた。「月曜日のことだが、評議員会は私がほとんど注視しなかったものを私宛に送致し、私に諂ったが、それに対してマックアイは自称によると私に関する^{rogues}生意気なメモ(注解)を作成し、私のことを何百もの詐欺師、ゴロツキ、悪党と呼んだ。私再拘留^{remand}され、彼らが私を彼らに服従^{serve}させると告げられた」。翌日の夜の10時に、彼は再び議員会に呼び出され、不服従(反抗)のかどで告発され、この砦内で監視^{underguard}状態におかれた。ジョリーも出頭を命じられたが、賢明にも病気を申し出たのだったが、それによって彼が救われた訳でもなかった。マスケット銃の銃隊が彼をメイドストーン号から引き出し、湾を横ぎり、ロバート・ドラモンドが「彼を犬のように扱い」、船医の船室に閉じ込めたカレドニア号に連行した。彼は、マデイラをひと樽と並んで、大樽半分<521/2 ガロン>と2アンケル^{property}27のブランデー、つまりこの植民地の正当な物資すべてを、自らの所有物としてメイドストーン号に積み込んだことで告発

された。

証拠物件の混乱や、その報告者たちに関する意図的なごまかしもあり、この惨めな喜劇の真相は今となれば明らかにしえない。なぜなら、誰もが、ただ、本当だと思ふこと、この会社や彼の同国人たちに信じて欲しいことだけを記録したのだから。だが、マードックが、「もしも私が彼との話し合いをせかして、彼の重大任務を台無しにしなければ」、彼は、マックイがスコットランドに向けて出帆するまで、咎人のままであったと述べてた時、マードックはことの次第に最も近かった可能性もある。

4月11日、さらなる熱病の発作^{attack}によって元気がなかったが、マックイは<p.192>^{The Three Sisters}三人姉妹号に乗り込み、日没前に船と共に出発した。評議員会から彼が運んだ急送便^{dispatches}は、母国への悲惨な書簡類だったが、一つの共通した主題があった。すなわち、救援、食料、増援の訴えであった。内密とされたこととは、この評議会、怠惰な指導者^{L o r d s}たち、信用^Dのならない者^oたち、グレンコウ一味に対する不平で痛烈なものであった。こうした苦情のいくばくかに通じ、これらの書簡類が送達されるべき時にスコットランドにいたであろう、マードックは、マックイとペニクックとの和解^{reconciliation}に際して作成された同意^{compact}のことにのちに仄かしている。彼の告げたことは、マックイが母国への長きにわたる航海の途中で書簡類の多くを開封し、「真実に説明を与える」ものを破棄した。しかし、これを記すにあたった時の、彼のマックイに対する憎悪は毒を持っており、それがおそらく彼の良識を曇らせたかも知れない。「私が彼に会う時はいつでも、もしも彼が偉大なるマックイ一族と、ハイランドのマックロウ^{M a c r a w s}とマックイズ^{M a c k a y s}一族²⁸すべての亡霊に守られているとして

27 ヨーロッパ大陸で酒類の液量単位として用いられたし、英国でも同様であった。

34 から 40 リットルに相当する。

28 マックロウズとマックイ一族、不詳。

も、それが彼の^{carcass}残骸を救うことはあり得ない。」

こうしたすべてを通じて、ウィリアム・パターソンは、終始病弱で寡黙を貫いた。病んで、疲労し、自らの理性を失いそうになりながら、途方もなくペニクックとトマス・ドラモンドに傷めつけられ、彼は目の前に置かれたものすべてに署名した。しかし彼の良心は休まらなかった。

The Three Sisters

三人姉妹号の出港の5日後、マードックがあの砦から解放された時、パターソンは彼に近づき、涙を流した。「彼は、私に対するあの不正な宣告を彼が宣言するなどと言う割に合わない役割に加担しないことを望んだ」と、マードックは述べ、「評議会が、ペニクックが望むようにそれを^{resignation}するよう彼に強要したのだ」と。彼はマードックに対して、その辞任を再考し、再びこの植民地の仕事に就くように乞うた。しかし、この^{seaman}海の男は拒否したのだった。

4月17日には、ジョリーも解放され、彼はメイドストーン号の船上でモントゴメリーとマードックに合流した。ジョリーは、カレドニア号からの乗組員たちが夜間に乗り込んできて、ピルキンソンに^{r u m}ラム酒と砂糖をせがみ、彼らがフランス難破船から引き上げた塩分で黒く汚れた硬貨を提供したとの報告を行なった。メイドストーン号は4月20日の午後に出航したが、風邪が一旦^{f e l l}止まり、船が港を離れたものの、^{c l e a r o f}錨を降ろさざるをえなくなった。日没前に、カレドニア号の^{p i n n a c e}ピンナースがスループ船の船尾にやってきて、^{a Council meeting}旗艦上で行われる評議会へのマードックの出席を要求した。彼は不承不承に出かけたが、ピルキンソンが彼の帰還を待つとの確信があつてのことだった。

彼は、かなり前にジョリーに報告されていたこの^{p l o t}企てが、今や^{c o n s p i r a t o r}陰謀を企む者、すなわち多数の^{m i d s h i p m a n}少尉候補生たちの一人、によって、< p.193>この評議会に背かれていたのを見抜いていた。彼と他の3名、セイント・アンドルー号の^{b o a t s w a i n}甲板長、^{g u n n e r}砲撃兵、それに^{g u n n e r ' s m a t e}砲撃兵の仲間——が捕縛され、「その砦に銃器のみならず、この植民地の崩壊に他ならぬ方向に

向かう、有害で恐ろしいその他の計画とを準備するだけでなく、その後所属する役人^{officers}たちを攻撃するための、非常に野蛮なやり方で、なおかつピストルの撃鉄を弾く状態」を決めたかどで告発された。

彼が、彼ら<評議会>の前に現れた時、評議員たちはマードックに、彼らがその夕方にその陰謀を見つけたに過ぎず、彼がそのことを知ってしばらくは、それに反対する情報を申し出なかったのを知り得なかった。彼は驚いて彼らを見つめた。「私は、多数の悪漢^{r. o. g. u. e. s.}たちが、役人面で、彼ら自身が企てたことについて、取り調べを行うのを、笑って見つめることに耐えられなかった。」彼は、彼がこの陰謀^{conspiracy}に責任があるとヤミクモに確信していたペニクックに一物^{m. e. a. n. t.}はあったが、その港湾の向こうで彼を待つメイドストーン号を思い起こして、彼の怒りとその慰^{amusement}みを抑制し、評議員たちに彼の知るすべてを告げた。ロウズ氏は、彼の供述^{deposition}を撤回^{take down}したが、マードックは、この秘書がページ毎に、「私が騙された訳はない」と署名したことを言い張った。マードックが、図々しくなると、彼がジョリーに与えた情報の悪用をしていると非難し始めると、彼らは、彼に対する不満はまったくないと言いながら、彼らは彼を追放した。

船の脇では、ペニクックがマードックの袖を掴んで、別れのポンチいっぱい飲もうと彼を誘った。酒によって友人にも変ずるか、少なくともおとなしい従者に変えられる別の約束破りの競争相手^{e. n. e. m. y.}もいると信じてのことだったのは疑いがない。彼らはロバート・ドラモンドによって、合流させられた。彼がその船室の使用を申し出たが、そのことによって語られたことすべてを耳にするのに立ち会うことができたのだ。4杯目でマードックは怒り、両名に愛想を尽かした。彼は、ペニクックがこの陰謀の最深部<裏側>にいると信じていたと述べ、メイドストーン号へ彼を戻す小舟をドラモンドに要求した。

その船は、見張り台^{She}にあった大砲からは、船が岬^{headland}を離れた時の合図^{salute}の

礼砲が放たれ、夜明けに出発した。その音は、重苦しい空気に包まれていた。雨季が再び始まったのだった。

<p.194> 「われわれの中で誰ひとり、後になって恥づることがない
者はなかった……………」

カレドニア号、1699年、4月から6月

最終的に議会の選挙が行われ、招集された。それは効力を持つには遅
そ過ぎたし、評議員のほとんどが、その有効性について長い間疑いを
持っていた。「われわれは、議会の招集に不都合を見出した」と、マッ
カイは、ローデリック・マッケンジに書き送っていた。「そして、住民
たちに、彼らがまもなく自由民となると知らせることも同様だった。そ
れに対する考えが、彼らを傲慢^{insolence}にして、指令系統^{command}を台無しにした。」し
かし、かりにも、入植者たちの精神を強化し、彼らに、彼らが従属する
者ではなく、あの気高い事業^{Noble Undertaking}の共同事業者^{partners}であることを説得する^{token}標章に
過ぎないにせよ、究極的には政府が必要だとしたのは、あの傲慢さ^{insolence}であ
り、不服従^{insubordination}なのであった。選挙は4月の終わり近くに行われ、8名の代表
者が、雨の中、ニュー・エディンバラの明確^{ill-defined}でない8つの地域から選出
された。あの要塞の柵からの警護のもとで注視しながら、マードック
は、カレドニア人たちが、名義人^{nominees}たちを拒否して、「ずる賢い船長より
も、正直な准大尉ないしは兵士^{soldier}」を選んだ時、評議会のあからさまな困
惑を目前に、喜ばしく感じた。これが政治的啓蒙の表れであったのは素
晴らしいことであつたが、それは間もなく、この植民地にとって致命的
なものとなる運命にあった。4月24日に代議員^{delegates}たちが招集され、
ニュー・エディンバラの一番大きな小屋の雨が滴る屋根の下で会合がも
たれた。評議員会と、コリン・キャンブル海軍大佐^{captain}なる議長による指導
の下、彼らはこの植民地の政府と、正義の創設と執行のために、三十四

^{Rules Ordinance}の法令と条例とを制定した。上記の^{settlers}入植者たちは、小屋の周りに押しかけて動き回る者でもなければ、雨に濡れながら、それぞれの^{clause}条項の読み上げ耳を傾け、それに基づく投票権を行使するものでもなかった。

ヒュー・ロウズが読み上げたように、その^{Preamble}前文は、「この^{Council}評議員会と議会に衆参した^{Deputies}代議員とに、その議長、事務員たちや公務員たちを選出し、「この入植地、ならびに陸海を問わずその^{dependencies}属領内の^{laws}諸法令の全権力と効力」を有する、以下の如き法令と諸規則のもとで統治を行う権限を付与したのであった。それには、以下のことが明確に主張されていた。そうした^{laws}諸法令が、^{Holy Scriptures}聖書における^{precepts}訓示、^{examples}規範、命令と禁制に基づき、カレドニア人たち<スコットランド人たち>は、この植民地の^{officers}役人たちに対する、^{blasphemy}冒瀆、^{profanity}不敬や^{disrespect}無礼が、苦役やパンと水と言う制限食によって<p.195>罰を与えられることを警告されている。^{public work}公共事業での^{hard labour}苦役は、^{slander}誹謗、^{quarreling}口論、^{brawling}喧嘩騒に対する^{Death}処罰である。死刑は、^{murder}殺人、^{rape}強姦、^{robbery}窃盗、^{house-breaking}押し込み強盗、^{treason}大逆（罪）ならびにこの植民地の敵対者たちとの^{correspondence}書簡のやり取りに対する^{munity}処罰であった。陰謀や扇動、この評議員会の^{safe-conducts}通行券（権）^{disobedience}違反や^{violation}侵害、あるいは^{duelling}決闘や^{assault}威嚇行為（たんに、他人を棒切れや鞭、または鞘に収めた剣によって他人を打つことも）、^{kidnapping}誘拐や自由民の^{liberty}独立の^{abuse}侵害に対する^{just punishment}正当な^{just punishment}処罰もそれに該当した。それ以上に法令に関わることにについては、……すなわち、ここでもパタースン

の寛容な考えが面目躍如だと推測されるのだが……カレドニア人たちの数々の市民権が、定義され、保護されており、しかるべき司法裁判と^{juries}陪審が定められ、彼らの義務の数々が断固として^{laid down}規定されている。誰であれ、裁判なしには、3ヶ月以上投獄されることはない。自由民の財産は、詐欺を働くとの証明がなければ、債務を制限されることはあり得ない。いかなる裁判官であれ、^{jurymen}陪審員であれ、どんな方面でも当人が利害関係にある裁判には出席できない。腐敗、^{bribery}贈収賄ならびに正義の^{perversion}曲解（侵害）などは、窃盗として罰が与えられるが、「利益の受け取

り、善意の奉仕が行われれば、いつでも惜しみなく、感謝を持って、埋め合わせがなされる」。

8名の構成員たちによる最初の行為は、彼らを選出した人々の心構えを反映していた。彼らは、食料を調達するあらゆる船舶を探索し、その正確な目録^{inventory}を作成し、砦へのその運搬を組織する委員会を指名した。カレドニア号とセイント・アンドルー号の両者には、供給が成功裏に行われ、彼らの将来の乗組員たちが、陸上要員^{landsmen}たちの最低水準以上であることが、明らかだった。ベニクックとロバート・ドラモンドは、この検査^{search}によって憤激させられ、彼らの説明だけで十分だと明言したが、ユニコーン号とエンデヴァー号の船長たちは、おとなしく彼らの食糧を水揚げしつつも、かの提督^{Commodore}と彼の野蛮な副提督とは遅延し、最後には何もすることがなかった。

食糧の供給（「台無しになって腐敗していた」とはパタースン^{Paterson}の表現だが）は、心配されていたほど最悪ではなかったが、それまでにあったものは長持ちしえなかった。亀の捕獲という骨の折れる^{arduous}海の仕事に遜色ないほど壮健な者はほとんどおらず、こうなると、家禽やプランティーンのような贈り物を持ってやって来るインディアンたちは減多になかった。メイドストン号が出発すると、ピルキントンが、この植民地を目指すとみなしたどの商船（商人）にも命令を出し、自分と言え、牛肉と小麦粉をできる限り素早く調達して、とって返す約束をした。にもかかわらず、日にちが経っても誰ひとり戻ることにはなかった。＜p.196＞この湾内には、その最初の訪問時にメイドストン号と共にやって来たスループ船があり、さらにその船は、ピルキントンが、この植民地の命により、乗組員も船長もない状態で後方に残されたものであった。この評議員会と議会とは、今や、あるたけの金を持たせてそれをジャマイカに派遣することに決めた。それは同時に書簡類をも運ぶことになっていた。病と熱による絶望の中、自らの小屋に伏していたパタースンは、船

医に対して、彼にはローデリック・マッケンジに手紙を書く体力とはつきりした思考が戻ると、瀉血をするのを、頼んだ。

私は、これで間もなく、これまでインド諸島に向けられていた、スコットランドによる、最善、最良の事業の先頭にあるわれわれの支援に、十分な関心を持たれかつ多忙となることが手近になることを望みます。私はあなたに、彼らがわれわれに強力かつ迅速な補給を行うなら、われわれは数ヶ月もすれば、彼らに全てを弁済するだけでなく、なおかつこの会社をヨーロッパで最良の基金^{fund}にすることができのですが、遅延するだけでなく、士気が乏しかったり、^{humour}覇気や気配りに欠けたりすると、このとるに足りないものは、放置され、その次には、われわれが種を撒いたものを他人がその果実を刈り取る結果となり、私が希望するそれが生き延びるのを見ることは叶わないことになるでしょう。

これが書かれた明晰^{clear}な精神状態^{mind}の中には、おそらく今一度振り返したはずの熱病以上に、意識^{delirium}の混濁があった。

そのスループ船は5月3日に、ユニコーン号の二等航海士ヘンリ・ペイトン²⁹の指揮で出発した。彼は、彼に与えられた資金^{money}により可能な限りの食糧を買い付け、全速で帰港することを命じられた。力無き倦怠感、あの砦の柵から地面を洗い流し、ニュー・エディンバラのみすぼらしい通りを泥の水路に変えたひっきりなしの降雨の日々が続いた。この評議員会はペニクックと争い、期待^{despised}されない政府には何の助言や指令を与えることもなかった。フランスのスループ船がやって来て、モウレパ

29 ユニコーン号の二等航海士。カリブ海で船を助成するために招聘されたが、彼は船を放棄。のちにジャマイカで逮捕された。既出、P

号の海難を調査せよとのペティ・グアヴェス^{P e t i t G u a v e s}の総督^{Govenor}からの命令書を携えていた。船の船長^{master}は、これには注意を払わず、この植民地^{piragua}にいくばくかの食糧を売りつけ、立ち去った。彼がいなくなると、カレドニア人たちは、その男がバカだったのか、彼らに支払いをさせて、意地悪く楽しんでいたのかと、自問したに相違ない。彼が彼らに述べたことは、彼がこの国の豊穡さと温和な気候に感服しているので、彼らのところを訪れ、共に暮らしたいし、その場合には、それは他の500名ものフランス人たちも一緒だ、とのことであった。

その月の半ば頃、情報と食糧とに事欠いて、評議会は丸木舟を出した。それは海岸に沿って東に進み、<p.197>この植民地を驚かせた知らせ^{n e w s}を持ってその週のうちに戻った。それは、ジャマイカのスループ船^{s a i l}のことを言いたて、船の船長にこの植民地への航海を頼んだ。彼はそれに従おうとしなかったが、彼の理由は、この丸木舟が評議員会に持ち帰った印刷紙^{printed sheet}に明白であった。4月9日の日曜日に、ジャマイカ総督ウィリアム・ビーズトン^{B e e s t o n}がその前日に署名した布告^{Proclamation}を公刊したのだった。

国王陛下の御名とその命により、いかなるものであれ、陛下の臣民たちに対して、以下のことを厳に命ずる。つまり、汝らは^{t h e y}、どのような場であっても、上記のスコットランド人たちとの通信をすることも、いかなるものであれ、彼ら<スコットランド人たち>に、汝ら自身であれ、その他の者たちであれ、その船舶のいくばくか、彼らの危険を覚悟で、国王陛下の命令を汚すことに応える、イングランド国民による何某かにせよ、武器、弾薬、食糧ないしはその他の必需品類^{n e c e s s a r y}を提供することを考えてはならぬ。

^{Sabbath}安息日にそのような布告が前触れもなく公版されたことは、月曜日に説明が行われた。食糧を積み込み、ダリエンを目指した2隻のスループ

船が、彼らがポルト・ロイアル³⁰を通過できる前に停船させられた。

フランス領カナダ国境からカリブ海域にいたるまで、あらゆるイングランド植民地を通じて、^{Governors and Lieutenant-Governors}総督や副総督は、ジェイムズ・ヴェーノンから彼らに送致された^{orders}命令に従って、同じ布告を発していた。^{Secretary}国務大臣から示されたその理由とは、^{His Majesty}国王陛下はスコットランド人たちの意図の真偽に気がついていなかったが、カレドニアの植民地とは、彼＜国王＞の^{allies}諸同盟国と彼が署名を交わした^{treaties}諸条約の精神や用語には反するもので、^{His Most Catholic Majesty}ダリエンがカトリック皇帝によって領有されたことは、したがって、この^{settlement}植民地そのものがこの会社の法令とイングランドとスペインとの友好関係の^{breach}破棄であったことにある。そう言った、微妙に^{f i n e - e d g e d}削り込まれた、^{diplomatic hypocrisy}如才ないみせかけ＜偽善行為＞が、^{clerk i n g}ヴァーノン氏の事務取扱いの中でももっとも巧みなやり口の一つであった。彼と彼の国王周辺の精通者たちは、1697年9月に、イングランドの^{Commissioners for Trade}交易委員たちが、国王に対して、ダリエンがスペインに領有されていなかったことを忠言しており、「スコットランド会社が眼前にいないなら、万難を排し急使をもって、というのも、それがイングランドの交易にとってこの上もなく重要なものであるから」、イングランド国王によって占有されるのが望ましいことを、熟知していたのであった。

<p.198>この布告に関する知らせは、入植者たちの士気に残っていたものを全て無効にした。今や彼らは、何の補給も、何の食料も、何の救済も期待できなかった。彼らは、イングランドからの決定的な敵対こそが、彼らに増援する同国人たちの失敗を説明するものだと考えた。「つまり、あの長い沈黙が」と、パターソンは口にした。「外でもない、その威嚇を受けていたことであって、おまけに、自前で処するようにわれわれに言ってよこすしかなかった、との理由に由来していたのだ」。彼らの悲惨

30 ジャマイカ南東部、キングズトンにある町。

な失敗や希望のない未来は、この上もなく楽観的な者にさえも今となれば、明らかであった。彼らは弱った上に、空腹で、ほんのわずかの者しか熱病や赤痢から逃れてはいなかった。10ヶ月前にあの砦を後にした1200名のうち、300から400名が今や命を失っていた。40名以上がカルタヘナの地下牢に横たわるか、植民地の全員が知っていたことだが、やはり死亡したとするのが妥当だった。途方もない小屋の寄せ集めや未完成の砦を除けば、彼らの成し遂げたものとして見るべきものはなかった。彼らは、浅ましい陰謀に彼らの時間を浪費した短気な男たちに操られていた。雨が降っていたし、向こう6ヶ月は雨のはずだった。彼らの靴は腐り、衣服はボロボロで、彼らの皮膚は炎症を起こした傷でムズムズしており、彼らはウジが這い上がった自分たちの食べ物を到底飲み込むことができなかった。何週間にもわたり、彼らは撤収を望んだが、今となってはこの布告が、不名誉もなく彼らが立ち去ることができるように、彼らを説得することになったのかもしれない。議会にいた誠実な彼らの准大尉や兵士たちを通じて、彼らは立ち退くのを要請された。

極めて手際よく^{expressed}表明されたので、この要求は、反抗的とか反乱の兆しがあるとして却下され得^{dismiss}なかったし、この評議会においてもパタースン以外にそれに反対するものはなかった。トマス・ドラモンドが3月以来ずっと、断続的な熱に苦しんでいたが、選挙<彼が選出される>の前に彼が申請し、拒否されることにはなったが、彼の健康をためということでスコットランドへの帰国のために出発したいとのことだった。彼の自尊心は降伏を考えると傷ついたし、この植民地は完全に放棄されるべきだという彼の兄弟の考えでその家名も^{family pride}そこなわれたが、この惨めな入植者たちを今や軽蔑して、ただ仮定の上とは言え、この入植地は放棄されるべきだということに合意した。評議会の他の兵士たちは彼の指導を受け入れた。パタースは再び自ら瀉血を施し、この動議と対決せんがために、病床から勇敢にもやって来た。

われわれがこの地を離れることに反対を唱えるものはないと分かった時、私は私のできることのすべてを彼らに説得した。こうした性質を持った物事に関する第一の風聞は、常にもっとも恐るべきものであり、<p.199>幸いなことに、われわれの母国は、このこと全体を全く預かり知らず、仮にかれらがそうでなかったとしても、この計画は断固として残ったままである。こうした事態にあって、過ぎ行くことにわれわれの向こう見ずな熱意をのちになって恥じるような者はひとりとしてなかった、と。

彼は、陸上要員たち^{landsmen}が溝や砦を防御するには未熟で力がなさすぎる^{ill and weak}ので、もしもスペイン人からの攻撃があれば、彼らは圧倒される^{overrun}、と告げられた。彼は同意したが、そのかわり示唆したことは、入植者たちは船団に乗り込むべきで、それはスコットランドからの救援が来るまで、沖合に少し離れて停泊できるからだ。評議会は彼に同意したように思われ、船団に荷積みの命令を発した。不自然なことではなかったが、この植民地が放棄されるはずで、この船団はスコットランドに戻るとの一つの流言が広がった。パターソンは抗議して、公式の否認を要求したが、評議会は無言であったので、ひとたび船団がこの湾を離れたなら、ペニクックとロバート・ドラモンドが全船舶を帰還させる意図を持っていることもないではないと思われた。6月始めまでこの植民地は混乱させられ、無秩序となって、しかるべき指導力も明確な決定もなくなった。パターソンは、全体としての不安^{general unease}が、恐慌状態^{恐慌状態}になったり、出発に対する決然とした準備への「障害物や躓きの石」^{lets stumbling-blocks} 31にさせるのを防ぐために、奮闘した。彼が述べたのは、ヘンリー・ペイトンがジャマイカから戻れ

31 Stumble-blocks、『聖書』ローマ書 14:13 つまづきの石、新約「ローマ人への手紙」14の13には、「私たちが、互いに裁き合うことなきように、それ以上に、兄弟にとって妨げになるもの、つまづきの石 stumbling block or obstacle になるものを置かないように決心しなさい」とある。

ば、そのスループ船が30名からなる格好の男たちによって配置され、この海岸沖を巡航し、「スコットランドからの何らかの救援や知らせがやってくるのが分かるまで、亀の捕獲や漁獲によって命をつなげる」はずだと言うことであった。彼はそれで残留する役をかって出た。トマス・ドラモンドがその提案を支持したが、彼が止まるとの意見だった。パタースンが帰国し、この会社に、この気高い事業^{its noble undertaking}が一体どのような状態なのかを報告するべきだと。

それから、6月5日、パタースンは体を衰えさせて昏倒し、彼の頭はこれまでで^{the wildest delirium}最悪の意識混濁状態に陥った。その次の日には一隻のフランス船が港にやって来て、船長が恐るべき知らせをもたらしした。彼はカルタヘナからやって来たが、そこに新たな総督^{Governor}がスペインから最近到着したことを告げた。この男が、拘留中だったドン・ディエゴ^{Don Diego}をその後任に指名して、この植民地に対して、強力な船団と兵員を配置していると。こうなると、スコットランド人たちの抵抗のしんがり^{l a s t}がボロボロになって恐慌状態をきたし、この地の防備にあたる将兵たち^{officers and men}（士官と兵隊）は、海岸にあった船に飛び乗った。6月10日までには、この会社の指揮官たちや、評議員たちのすべてが、パタースンとドラモンドを除いて、<p.200>自分たちの従者や荷物などともろともに、銘々が船に乗船するありさまであった。撤収を組織するにはほとんど企てもなされず、恐怖や混乱に備える1週間が必要なだけであった。入植者たちは彼らに可能ななどの船でにも乗船し、苛立ちながら直ぐにも出発することを要求した。この砦内に配備されていた銃器類は、トマス・ドラモンドの使うのは別として、すでに放棄されてしまっていた。力と脅しによって数名の部下をかき集め、彼は、多大なる労務と犠牲を払ったあの防御柵の突破口^{b r e a c h}を破り、銃機を小型船に引き下ろし、一行が旗艦へと渡り切るまで、1名の武装した護衛と共に、待機していた。

海浜にあった自らの小屋の中では、ほとんどの時間を意識混濁状態^{i n a d e l i r i u m}で

屋根を走る雨でずぶ濡れになりながら、パターソンは放置されていた。

「トマス・ドラモンド大佐を除き、誰ひとり私を尋ねる（見舞う）者はなかったが、彼は、私と共に、それでもこの地を離れるとのわれわれの考えを嘆き、われわれが出発するに先立ち、母国からの便りを聞くことさえができたかと、神に祈った」。ドラモンドはパターソンのことをいささかも尊敬してはなかったし、いつも彼を常ならず蔑んではいたが、この期に及んでの病める男の勇気を認め、誠意ある配慮をもってそれに敬意を払った。パターソンに見られた、稀に意識を回復する時期のひと時に、この近衛兵連隊兵士の指揮官が、セイント・アンドルー号の船上で、平穩を乱す一つの風聞を彼に知らせた。それによれば、ペニクックにはスコットランドに出帆する意図が皆目ないということであった。彼は海賊としてこの沿岸に沿って巡航するのを提案し、スコットランド人たちはずっと海賊と呼ばれて来し、イングランドやスペインに捕らえられれば、そうしたものとして吊るされるに違いないから、彼ら<スコットランド人たち>は、できるだけ利益を得て、地獄に落ちればいいのだ、と。その上、もしもあの船団がスコットランドに帰国しても、乗組員たちは、彼らに貸しがある賃銀の支払いを恩知らずの会社に期待できるとは限らない。パターソンは別の評議員たちに絶望したメッセージを送り、海浜で彼<ペニクック？>に会って、その報告が間違っていないなら、ペニクックに護衛をつけるように懇願した。誰も現れはしなかったが、返信を送る労をとった者がいうことには、病気が酷すぎるので船を離れることができないとのことであった。

パターソンは最後の数日間のことを、ほとんど記憶していなかった。6月16日に彼は、急いでユニコーン号に運ばれたが、おそらくドラモンドとターンブルによってだったろう。彼のわずかに数点の衣服、彼の妻の所有物からなる遺品などがその晩に取り出され、「そのほとんどすべてには損傷があり、しっけていたので、ほとんど後になると腐ってしまっ

た」。挫かれた子供のように、<p.201>ジャマイカの友人から彼が借りて、今や彼の小屋の残骸に置き去りにされている、いくつかの真鍮製の薬缶や16個の鉄製の壺を彼は虚しくせがんだ。彼は熱で怒り狂って、砂糖、タバコ、さらにこの植民地で使った松脂などに費やした72ポンドを即座に払うよう要求した。こういう病的な苛立ちpetulanceの中で、彼はその偉大な夢から永遠に離れた。

6月18日の午前中に、北向きの風のため彼らが水門を通して航海することができなくなって、カレドニア号、ユニコーン号、エンデヴァー号は、その湾から出るのに曳航warpされることになった。彼らはフォース・ポイント沖を通過し、トマス・ドラモンドは自分の兄弟の船からユニコーン号までを漕いで渡ることになった。彼は、パタースンに署名をせがんだ書類を携えていた。「私は病気が酷かったので、世話をやきたくはなかった」とパタースンは回想している、「だが、私がいなければ定足数になりえないのでと言いながら、彼はそれを急かした。これに私は署名をした」。彼はその書類が何を言いたいのかほとんど思い起こすことができなかったが、彼の考えによると、この船団にはニューイングランドのボストンあるいはサレム³²に赴き、乗船している評議員たちには食糧と交換できるいかなる財貨にせよ販売を行い、残りをスコットランドに運搬するとの指令があった。ペニクックによる海賊行為という大胆な計画は、仮に彼が心底その提案をしたのであっても、忘れられた。彼らは帰国の途にあった。

ドラモンドがカレドニア号に戻った時、日没の強風が船を吹き飛ばし、エンデヴァー号は海上の視界から消えた。疲労が重なったその船の乗組員による操舵がうまく行かず、ユニコーン号は、上部甲板中央部にあったその船のロングボートlongboatを粉碎し、船首bowにあった錨をもぎ取った波

32 Salem、カナン Canaan の古代都市；後年 Jerusalem と同一視された。

によって舷側部^{broadside}への打撃を受けた。その船は、船尾^{stern}からもう一方の錨を失い、危険と恐怖のなかその夜を乗り切った黄金島の島かげに駆け込んだ。翌朝、セイント・アンドルー号が、満帆状態^{full sail}で外洋^{open sea}に進みつつあるのが東方向^{to the east}に見えた。その船はユニコーン号の信号を無視し、すぐさま砲撃を行なった。錨を揚げる力もなく、ユニコーン号はその船尾綱を切り落として、後を追った。

カレドニア湾の背後には、朽ちつつある小屋、ぬかるみの道、セイント・アンドルー要塞の消滅しつつある防御策、さらに6名の男たちが残されていた。小船に向かう活路^{fight their way to the boats}を切り開くには消耗し過ぎており、自分たち自身の要請によって自滅^{left to die}に任された。「あわれで、愚かなものたちよ」、ロジャ・オズワルドは彼らをそう呼んだが、自ら波打ち際にそっと近づいて、「そんなに華奢な者なら、海に危険を犯すこともしなけりゃよかったのに。」船団の出発を悲しいことと理解できないまま眺めていたインディアンたちは、森から出て来て、彼らに隠れるところを与えた。上記の6名の男たちは、＜p.202＞驚くことになっただろう、彼らは、すべての入植者たちの中で一人が、のちに同国に人たちから称賛され、尊敬の的になるのを知ることになったとなれば。

数週間後、スペインのブリガンチンがこの湾に警戒しながら深く滑り込んだ。その船長は、ジュアン・デルガード³³と言ったが、上陸して、夥しい空っぽの小屋の残骸の中を彷徨った。彼をこの砦の24基の銃眼^{embrasures}や、防御柵^{palisade}の中の突破口^{breach}の傍に若干の大砲の弾を数えあげた。さらに、大隊構成員^{battalion ranks}の400名と、2名の墓石を砦内に見つけた。それは、4名の怯えたインディアンたちと、見捨てられたスコットランド人たちの一人の白人を連れ戻った。デルガードは、彼を優しい態度で取り扱った。

立ち去る前に、スペイン人たちは、セイント・アンドルー要塞のもの

33 ⇨ 鰐、ケーブル：会場の距離を示す単位；米海軍では72フィート（約219m）、英海軍では608フィート（約185m）を示す。：小学館ランダムハウス。

と推定できしるものを破壊し、ニュー・エディンバラの小屋群を焼き払った。

「彼らのほとんどが死亡、残りも誠に悲しむべき状態」

ジャマイカ、ニューヨーク、1699年7月から10月

6月18日の評議会で定足数をみたしたとの署名のある、ロバート・ドラモンドの命令では、「船舶の残留者を随伴して」可能な限り最善のことがなされたこととなった。彼は、彼ら<残留者>の誰も待つてはいなかった。しかし、あの小さなエンデヴァー号は、12日間も、カレドニア号の ^{top sails in sight} トップスルを視界に入れたままにできたのだったし、あまつさえ、その ^{larboard quarter} 左舷後方にひっきりなしにかかる波の下でバラバラになる恐れがあった ^{dying} 瀕死の乗組員たちや ^{timbers} 肋材にも関わらず、エンデヴァー号の船尾の ^{cable's length} 1 罫以内に³⁴時にはやって来たのだった。7月1日、その船の船長ジョン・リチャード³⁵は、ドラモンドに対して、必死の信号を送り、救助を求めた。そのピンク³⁶の大櫓が折れ、船は前方から<船首の方に>浸水を始め³⁷つつあった。返答を待つこともなく、リチャードはその乗組員たちと怯えた乗船客たちに、ボートに乗り込むように命じた。エンデヴァー号の船首が沈没する³⁸と、ドラモンドは渋々その船を廻し³⁹、生存者たちを救助した⁴⁰。彼らのほとんどが、ほどなく、神のお導きにより、彼らの水没を願うことになった。

250名の入植者たちが、ユニコーン号の船上にひしめき合い、役に立た

34 カレドニア号の船尾から 608 フィート以内に

35 Richard, John 不詳。

36 既述のように、船尾の狭い帆船。

37 make, take in water ⇨ 浸水する、漏水する。

38 go down ⇨ 沈没する。

39 put about ⇨ 進路を変える、転回する。

40 pick up ⇨ 拾い上げる、乗せる、救助する、小学館ランダムハウス。

ない交易品からなる朽ちつつあったまがいもの^{m o c k e r y}が並ぶ甲板の下に身を横たえた。船が<ユニコーン号>が黄金島の島陰^{l e e}を離れる前に、その水が酸っぱくなった。船の食糧は、その匂いで人々には吐き気を催すことになったが、船上にあった人たちの半数をかるうじて支えるほどとなり、<p.203>死というものが、まもなくその辻褄を合わせるようになった。この湾内に待機しながら、その乗組員^{c r e w}たちは、陸上要員^{L a n d s m e n}たちによって船上にもたらされた熱病や瀉痢に感染し、こうなるとその船^{s h i p}では寝ずの番に6名の船員^{seamen}しか動員できなくなった。ジョン・アンダーソンは、マードックなき後この船の指揮を任されたのだったが、使い手の^{f i t t e s t}陸上要員^{L a n d m e n}たちを帆柱の上や船室内に起用し、気候が許す限り、できる限り多くの帆を張った。⁴¹あいにくの気候で、恐ろしい入道雲からなる空模様や、突然のスコールがあり、1時間に3から4回も人を埋葬布^{s h r o u d s}に放りこむほどの風の変化もあった。ジャマイカの南で、ユニコーン号は、カレドニアへの帰還の航海の途中、ヘンリー・ペイトンのスループ船に追いついた。両船は接近して停泊したが、波打つ海を越えて大声で呼び合った。ユニコーン号の知らせは、その姿、その舷側にいて憔悴したもののたちの真っ青な顔から、明白だったし、ペイトンは想像されたこと以外には何も報告しなかった。ビーストンの^{P r o c l a m a t i o n}布告のため、彼はポート・ロイアルには食糧を残さなかった。天候が彼らを引き離したが、スループ船は進路を変え⁴²、あたかもうろたえる犬であるかのようにユニコーン号が後についた。

その晩、激しい強風が両船を襲った。スループ船はそれを切り抜けた^{w e a t h e r e d}が、<p.204>ユニコーン号は、前檣^{f o r e m a s t}と後檣^{m i z z e n t o p}を失い、上部甲板中央を冠水させるような非常に多くの穴を開けてしまった。アンダーソンは、前後不覚の者や死にかけたもの以外は、一致協力せよと命じた。⁴³明け方ま

41 crowd on sail →できるだけ多く帆を張る、小学館。

42 進路を変える、put about、小学館。

でに海は静かになり、風は和らいだが、快晴の澄み切った光の中に、セイント・アンドルー号が2リーグの距離にあって、そのメインスル^{大 橋}⁴⁴を配し、船尾に太陽を輝かせた状態にあるのを眼にして、ユニコーン号は驚かされた。ペイトンはなお黙したまま、救助を求める叫び声を背に静かにしていた。アンダースンは、その主要航路も、海難^{distress}の信号も変えることができなかったが、彼は後に続くように号砲を2発放ち、これによってセイント・アンドルー号はゆっくりとやってきて、半リーグ以内に並んだ。アンダースンはそのボートで船に逃れ、セイント・アンドルー号が、彼の甲板を洗い流し、応急の帆柱^{j u r y - m a s t}を整える人員を派遣するのを希望した。ペニクックは病気で、自分の船室で横になっていたから、自分自身の病状が不合理であること以外にはどんな不幸であってもイライラで取り合わなかった。彼は救助を拒否し、アンダースンの懇願とコリン・キャンブル評議員の主張のあとになって、ペイトンへの命令の署名を行い、待機して、彼にできる助けを行うように告げた。

次の日に風が起こって、セイント・アンドルー号は姿を消した。そのスループ船は、ユニコーン号の声の届く範囲にさらに24時間留まったが、その後、パターソンに言わせれば、「書面状の命令や、アンダースン船長に繰返されたペイトンの誓約にもかかわらず、真っ昼間にわれわれから離れて出帆した」。ユニコーン号が再び航行可能となったのは、1週間という、好天で穏やかな天候となった時期が現れてからであった。立つことができたのは、こうなると、わずかに20名の陸上要員^{u n d e r w a y}でしかなく、アンダースンは彼らを、彼の水兵たちが漂流物を取り除き、応急帆柱^{L a n d s m e n}を立て直す間、情け容赦もなくポンプ室に放り込んだのだった。

仮に船の指揮官にその気があったとしても、セイント・アンドルー号が救助するのは不可能だった。ユニコーン号の乗組員たちよりも弱くはな

43 一致団結せよ、all hands to the pumps。

44 メーンマストのもっとも下の帆。

かったとしても、その船の乗組員たちは同程度に疲弊していた。船の海上士官たちは死亡するか、死につつあったし、その船はすぐにコリン・キャンブルの指揮下に入った。彼は勇敢な兵士ではあったが、羅針盤架台や棒切れについてよりも、彼は見張り兵や縦射撃についての方に精通していた。バリアヴェント艦隊からの油断なき巡洋艦の兆しによって、船がジャマイカの島陰に入り、ブルーフィールド⁴⁵の沖合に錨を降ろすまで、その船は7週間もの海上での恐怖の時間を味わった。カレドニア湾に持ち込んでしまった熱病が、悪臭を発する船の甲板の下で猛威を振るった。その航路では150名の人間たちが死亡した。どこか、いつの日か、いつの晩か、ロバート・ペニクックが＜p.205＞それに加わり、自らの壮麗な船室から帆布の経帷子^{canvas shroud}を纏って運ばれ、カレドニアの評議会と議会の一員であると同時に、スコットランド会社の船団総督^{Comodore}に相応しく、過不足なき敬意と儀礼とに従い、船外に投げられた。彼の死を悼む言葉は、生き残った者たちを記した書簡や日誌の類のどこを探しても見当たらない。

「一体全体どうすればよいのか、私には分からない」、キャンブルは友人のローリー・マッケンジに宛てて書き送った。「というのも、水兵たちが反乱を起こし、害をなそうとしているのは間違いないが、それは彼らに1週間分の食料がないことのためで、おまけにここで彼らの賃銀が頂戴できるのを期待しているのです……………彼らは、私の知る限り最善の乗組員たちで、そうした怠け者でもない者たちこそ一番ひどい困惑の中にいるのです」。

彼を安全な着陸に導き、今では病を得て飢えた状態にある人についてその見解は厳しいものであったが、キャンブルは、彼らに食べ物を見つけようと最善を尽くした。彼は海岸に赴き、ポート・ロイヤルへと馬を

45 ニカラグア、カリブ海側の地名か？

駆り、その砦の上の立派な白い家<屋敷>で、ウィリアム・ビーツトン⁴⁶から誠意ある歓迎を受けた。1杯のワイン、タバコの一服、
exchange of courtesie
 慇懃なやりとり<挨拶を交わすこと>、こうしたすべてのことは、スコットランド人たち向けに整えられていたことであった。「彼は、彼らが飢えるのは間違いないとしても、私の部下たちに供される品々の提供で私を煩わせることはありませんでした。」彼が受け取った数々の命令は別として、ビーツトンは、イングランド人たちとスコットランド人たちの間にはいかなる差もないという驚くべき信念outrageous beliefを持って、ジャマイカ人商人たちに対する報復を行ってきたスペイン人たちを恐れていた。彼らは、クラブ島沖でスループ船を攻撃して、自らの船を離れて水泳中だったその船の船長の下顎の骨を吹き飛ばしたのみならず、カルタヘナにさらに2隻を残して、もう一隻から奴隷の積荷cargoを奪取した。ビーツトンは、彼の島の船長たちの怒りが、セイント・アンドルー号に与えられるいかなる助力によっても耐えられることはないことを承知していた。だが、彼は同情がなかった訳でもなかった。「スコットランド人たちはカレドニアから完全に退去したのです」、と彼はロンドンに報告し、加えてキャンブルには慎重に打診していた。「彼らのほとんどは死亡し、その残りにしても、深い同情に値する誠に悲しむべき状態にある」、と。

悲痛な恥を忍んで、キャンブルはこの時、この港湾に停泊していたジョン・ベンボウを訪ねた。この元帥Admiralは、セイント・アンドルー号をポート・ロイアルの安全な停泊地に曳航する際の、食料も援助も一切与えようとはしなかった。ジャマイカにおけるこの会社の代理人agent、ブレア博士⁴⁷は、怖気frightened付いた人間で、キャンブルを受け入れない言い訳として病気だと主張した。

<p.206>かくして、スコットランド人たちは、物乞いをするか、も

46 Beeston, William 不詳。

しくは盗みをするかのいずれかを余儀なくされた。彼らの船は、彼らが係留に運んだところで浸水し、手当てのないままの病気や、毎日のような死亡がこの湾内に急速に広がった。大多数の乗組員たちは放棄され、商船などやベンボウ艦隊の厳しい選別によって奪い取られた。口にするパンの不足のため、海でなら戦える陸上要員たちは、農園の囚われの奴隷たちとして署名をした。あつたとしても、ほとんどのものは再度国には帰れなかった。キャンブルは船上でこの夏を切り抜け、スコットランドからの救助に望みを託し、まだ船を操れる部下たちがいる間に湾内で船を廃船にするとの忠告を拒否していた。その秋、カリブ海中に伝染力の強い伝染病がやって来たが、どの島もそれを免れることはなかった。ジャマイカではイングランド人たちの経験では最悪のことがあり、セント・アンドルー号の船上には、弱々しく、顔色の悪い痩せこけた人たちが、それを前にしても救いようがなかった。「カレドニアからやってきたスコットランド人たちが」、とビーツトンは報告した。「非常にたくさん死亡して、最後には、船を操る男たちが不足して廃船せざるを得なくなった」。キャンブルは海岸に赴き、ブレアが与えた施しや放出で生き延びた。それでも彼は、救助が来ると信じていた。

カレドニア号は、7週間でニュー・イングランドに到着し、8月8日にサンデイ・フック⁴⁸に錨を降ろした。船はこの航海途上で105名の人命を失い、2日後に死者と、吐瀉物、排泄物の悪臭を充満させながら次にニューヨークに上陸した時には、さらに7名が死亡していた。150名がなお生存していたが、そのうち、ドラモンドやサミュエル・ヴィッチを含む3分の1が健康状態に問題があり、残りも疲労のため力がなかった。当人が熱病で倒れ込むまで、ロバート・ドラモンドとその配下の者たちは、生き残った者たちにすれば何時果てるとも分からない強風や死につ

47 ブレア博士、不詳。

48 ニュー・ジャージー州東部、ニュー・ヨーク湾にあるおよそ10キロにわたる半島。

つある者の呻き声、その後夜にお悔やみをした祈祷者たちを、よりも鮮明に思いおこさせる、情け容赦ない凶暴さで乗組員たちや乗客たちを運んだ。ニューヨークの3名のスコットランド人商人たちは、船の到着時に船に乗り込み、その後恐怖でゾツとして、スコットランドに対して抗議を表明する書簡を出した。

これまでかつて、人々が彼らのみすぼらしい人々に与えた路傍の非道以上に忌まわしく残虐なことがあったろうか？彼らは病に倒れると直ぐに甲板上に集められ、そこで激しい降雨に曝された。さらに、彼らの食糧のほとんどが、小麦ではあったが、その病たるや瀉痢であった人々は、わずかな塩味のオートミールと少量の水以外に何も口にはしていなかったし、＜p.207＞そのどちらにも預かることがなかったに相違ないのだ。彼らを慰めるとか、救いを与えようと、彼らが訴える時には、耳に心地よいキリスト教徒らしい慰め！……「役立たず！お前には過ぎたことだ！」夜が明けて、社員たちや外科医たちが安否を尋ねにやって来て、一体何人船外に捨てられるべきかとなった時、答えは4、あるいはおそらく5名。「どうして」、彼らは答える、「それ以上だろう」、と。

ユニコーン号の船上はもっと悪かった。病気や詰め込みすぎによるものではあったが、残虐によるものではなかった。というのも、アンダースンは、温情ある人間だったから。その応急法のもとではほとんど打つ手もなく、おまけに漏水がひどく、船はキューバの西方に追いやられ、船がマタンザス港⁴⁹に避難所を見出すまで、沿岸に沿って風上に追いやられた。⁵⁰アンダースンは、真水を見つけるため、緑なす海岸にピンネースを着岸させた。彼はその代わりにスペイン人の砦を発見したが、その壁からは24もの銃眼が穴を開けていた。彼はかろうじてマスカット銃の

雨の下に逃れたが、その言語技術を行使する機会がほとんどなく、自身自身の言語＜英語＞でスペイン人たちに対応するために歩を進めたベンジャミン・スペンスを後に残した。アンダースンは非常に苦心して船をこの湾から逃し、武装したピアグラ＜木の幹をくり抜いたカヌー＞と砦の銃器の回転撃ちをしながら後を追った。

ユニコーン号は北方に進み、フロリダ・キーズ⁵¹を越して、ヴァージニア海岸に至り、数度にわたり座礁を繰り返し、その意志と船体にあったある種の奇跡的な力によって針路を変えた。8月13日船はサンディ・フックに到達、翌日にはニュー・ヨークに來たった。「神のお導きによって」と、パターソンは口にした。

「船とわれらの生命の安全とは、われわれの指揮官、ジョン・アンダースン船長の苦心と精励あつてのことだ」。水漏れのする、壊れたマストによって、彼はわが社に十分な貢献を行なったが、高いコストもかかった。船に残された100人中60名が病氣ないしは死にかけである。評議員のチャールズ・フォーブズは、スペイン人の射程内を逃れ、マタンザス湾で引き渡された。大佐、^{captain}少佐ないし、^{lieutenant}准大尉は一人も残らず、^{subaltern}下士官^{soldiers}すらほとんどいなかった。「われわれはほぼ150名を失ったが、彼らのほとんどが手当てや彼らを回復させる手段に不足があったからで、そうした状態のもとでは、われわれの主治医^{chief surgeon}であったヘクター・マッケンジーの死亡による損失や不都合はわずかなものであった」。彼を愛したパターソンは述べた、「何週間にもわたる、船上のみならず海浜でも人々の中にあつて、不屈の骨折りと努力」の結果として彼は死亡したのだと。

49 マタンザス、キューバ北西岸の港市。

50 著者ブレブルがこのくだりを書いたのは1967年前後、われわれは2021年にいるのだが、ユニコーン号が遭遇した景色を想像すると、実際に記者は、マタンザス近傍に足を踏み入れたこともないが、その後の変貌を想像してしまう。

51 フロリダ州南岸沖の小島やサンゴ礁群、長さ240キロ、主島はKey Largo 島。

しかしながら、こうした事情には、何ヶ月も書こうとはしなかった。彼は<p.208>今や重篤な病の状態にあり、自らのためには何もできず、況や彼のために設えられた細やかな船室から移動もできなかった。彼がカレドニアから運ばれてきた時から、徐々に彼は人生に対する関心を捨て去った。彼の妻、夢、その友人たちや仲間たちなどのすべてが失われた今、彼が死というもののの中にあるあらゆるものに深い責務を感じた結果、彼がそれから逃れて、真鍮の薬缶や鉄製のポットのようなものを失ったことに対してバカバカしい後悔に逃れた可能性もある。少し経てば、こうしたものも重要ではなくなった。彼の魂は静寂な状態で、彼の両眼は曇らされ、心は消え去った。ドラモンドの船を訪れた同じ3名のスコットランド人たちは、ユニコーン号に後になって乗船した。「悲しみがパターソンの心と頭脳とを壊してしまった」と彼らは述べた、「そして今や彼は子供のような状態だ」。

熱病から回復して、兄弟のウィリアム・ヴェッチに手紙を書きながら、サミュエル・ヴェッチはパターソンに対していささかの同情も持たなかった。彼の言い分は、すべての不幸や災厄の責任は事によると、この男の「悪さか愚考のいずれかまたは両方」に責任があったのだ。ロバート・ドラモンドは、同じく快復して理事たちへ最初の報告を書いたが、名指しでは誰も咎めることなく、^{Directors}配慮によって示唆にだけ留めた。いかなる将来の災厄があったとしてその責任については、彼はさらに仄めかしたが、この会社のものだとするのがよいと。「帰国に向けて船を漕ぎ出すのは厳しいのではと存じます。と申しますのも、わが国民はなおも死亡が続いており、誰もが弱っています。つまり、活動に向く人たちはここでは非常にわずかでしかありません。……主のお助けを得て、今後2週間か3週間では^{put to sea}私が出帆したいと思います。私は、書簡によってあなたにわれわれの経験したこの悲惨な状態をあなたに説明することができません。われわれがカレドニアを離れることになって間もなく、

飢餓状態に直面し、この世から放擲されました。その上で船をこの場所に到着させるという非常な困難となったのでした」。

3週間以内にこの船団を彼が出航させるとの主張は、正気とは思えない楽観論で、彼が自分でそれを信じていたのではなかっただろう。たとえ彼がその船に食糧を用意できたとしても、大西洋航海のために、1名の船員とするのに十分な乗組員たちをかき集めることはおよそできない相談だったであろう。さらに食料の問題が彼の最大の懸案であった。ニューイングランドには有力なスコットランド入植地があった。東西ニュージャージー、ペシルヴェニアそしてニューヨークの交易人たちはスコットランド人たちだったし、メアリランドやヴェージニアの南部にはそれを上回る人たちがいた。しかし、彼らが富裕で、影響力があり、おまけに大きくなりつつある政治力の持ち主たちではあったが、彼らは強い疑念を持って注視されていた。あの布告が彼らを驚かせ、ダリエンへのスリー・シスターズ^{dispatch}の派遣<p.209>同様に、それ以上の実際上の同情に水を差してしまった。航海条例が常に彼らに対して厳しく強制された。つまり、彼らの船舶の一隻が最近テムズ川で捕えられたのだ——さらに彼らは反逆罪やジャコバイトの反乱で最近告発されていた。頑固な再洗礼派⁵²で自ら今なお清教徒革命戦争を闘っているかのような行動をする向きのあった、頑固な聖職者、ジャージーのジェレマイア・バッセ^{Basse}総督は、（ある程度の正当性を持って）彼らの多くが海賊^{pirates}と共謀していると信じていた。彼はスコットランド人たちのことを、あたかも彼らがこの植民地^{creeping disease}の忍びよる病であるかのように語った。「彼らの人数は歳を負って増加しているのに対して、わが国民たちの利害はとても少なくなっている」、と。

ニューヨーク、マサーチュセッツさらにニューハンプシャの総督はベ

52 幼児洗礼を無効として、内的回心による成人洗礼を提唱、実施した。

ルモント伯のリチャード・タート⁵³で、60歳台の初頭には血気盛んで、
 衝動的な^{i m p u l s i v e}アングロ・アイリシュだったが、彼の友人だった国王から「正
 直にしておそれを知らぬ」ものとの^{r i g h t l y r e g a r d e d}正当な評価を得ていた。彼は腐敗や
 賄賂を毛嫌いし、^{h i s}国王の政府に影響力を行使しようとする植民地の者た
 ちの多くに対しては、混じり気のない貴族的な侮蔑をあらわにしてい
 た。ニューヨークの^{p r a c t i c e o f L a w}法実務は、彼によれば、恥ずべき人物たちの手中に
 あって、そのうちの一人はダンス教師、もう一人が手袋製造人で、その
 第3人物がエディンバラで瀆神のかどをもって絞首刑になるべきだった
 一スコットランド人なのであった。彼は中風が原因でひどく体調がわる
 く、痛みがある時には思いやりに欠けることもあると詫びていた。彼は
 朝の5時から夜の10時まで働き、会社の怠け者の役員たち仲間よりも自
 らのヴァレット・ド・シャンブル仲間を好んだ。彼は^{ススコットランド人たち}カレドニアンズのこと
 を気の毒に思っていたが、彼の命令は一切援助は与えないことで、彼
 はそれに従うのを心に決めていた。どんな場合であっても、その時その
 時に心中には別の考えがあった。彼は町を離れて、^{I r o q u o i s}イロクォイ族と巧み
 な協定を結んでおり、帰国に際しては、海賊ウィリアム・キッドと取引
 しなければならなかった。この不運な上に、あばたのあったスコットラ
 ンド人は、かつて私掠船員としてこの総督の許可を与えられていたが、
 それを^{l i c e n s e}海賊行為の許可だと解釈して、金で1000ポンド、何本かの銀の延
 べ棒、彼が大胆にもベルモント夫人に献呈した見事なエナメル加工の施
 された箱入りの宝石類などを携えてニュー・イングランドに舞い戻った
 こともあった。この総督はこの贈り物を没収し、その図々しい寄贈者を
 投獄した。これにとどまらず彼は、キッドがカレドニアで彼の同郷人た
 ちに合流しようとしたことを耳にした途端、怒り狂ったのであった。ロ
 ンドンにおけるこの提督の敵対者たちがどのようにこれを利用するかに

53 Coote、P に既出。

は疑いがなかった。^{Commissioners of Trade} 交易委員会は最近、ダリエンに食糧を運ぶことを5隻のニュー・イングランド船に許可したことで彼を咎めたので、< p.210>5隻とは実際には1隻のブリガンチン、すなわちスリーシスターズ^{p.210}のことで、この船は彼がここで彼の認可を取る前に出帆していたとの痛烈な返答を受けざるを得なかったのであった。カユガ湖⁵⁴畔のイロクォイ族の粗末な家屋から、彼は陰しい顔で、スコットランド人たちとその下での^{obligations}責務に対するあの布告を^{Lieutenant-Governor}総督代理ナンファンに思い新たにさせた。

ジョン・ナンファンは、ベルモント夫人の^{kinsman}縁者で、疑いもなく彼の職務のことを彼女の夫に負っていたが、この伯爵が彼のインディアン^{kinsman}の友人たちと袂を分かち、スコットランドとの取引に戻ったなら、ずっと幸福だったはずの、^{f u s s y}小うるさい、優柔不断な男であった。彼はカレドニア人たちのことを衷心からは認めてはおらず、彼が彼らと緊密であるべきだと熟知はしていたが、彼らの嘆かわしい状態に心を動かされてはいたのだった。「彼らは、疲れと空腹の極まりから体力をすっかり失い」と彼はベルモントに書き送った。「彼らには金が全然ないので、法律に従ってどうすれば必需品の^{b a r t e r}現物交換が許されるのかを知らせてくれるのを望む」彼らの悲惨な状態は同感を掻き立てるには十分だ」。この^{h a r d}総督は融通の効かない人間ではなかったので、^{surgeon}医者^{d i e t}の勧めた緩くない食餌療法と、その上に彼が当時居住していた^{gubernatorial residence}知事官舎のあったマサチューセッツ湾の厳しい空気によって痛風から改善していた。「カレドニア人たちに食糧を供給することに反対する私の命令がいかに厳しいものか貴殿は承知だろう」、と彼は書いた。「とは言っても、これらの船が直接スコットランドに向かうことに十分な確信ができるなら、彼らの航海にちょうど十分な食糧を与えてもよいのだ」と。

54 カユガ湖、ニューヨーク州中部の湖で、長さ 64 キロ。

不運にも、ナンファンは、なんの確信も得られなかった。ベルモントから知らせがあるまで、彼はスコットランド人たちに対して当座の必需品を掛け買いするのを許可していたから、これに元氣を得て彼らは彼らの船にすっかり食糧を準備する許可を要求して、その交換に交易品を提供した。ロバート・ドラモンドは、^{it was true}確かに、彼がスコットランドに帰る意思があるのを誓ったが、彼の兄弟のトマスは、自らがダリエンにとって返す船の出発を提案していたスループ船、ないしはブリガンチンを探しているようにと言われていた。彼やその他の士官^{officers}たちは、特にヴェッチとターンブルとは、さらに彼らの尊大な自尊心を示して、ナンファンに対して苦言を呈していた。⁵⁵彼らは、この提督のことを好んで困惑させた同調者たちに海岸沿いに住まわされていたが、彼らはみすばらしい深紅の服姿で船外を横柄に闊歩して、誰もがニヤニヤした目つきで刀に触っていた。

船上のカレドニア人たちのほとんどはもはや自尊心を出す余裕はなかった。毎日毎日彼らの1名かそれ以上が熱病か瀉痢で死亡した。少数の男たちとか、確実にツケが効くものを除いて、彼らは上陸を許可されなかった。<p.211>ロジャ・オズワルドは、^{hands and knees}四つん這いになり、彼の父親の名前に逆らい、彼に喜んで金銭を貸そうという商人を探すために上陸した。「私は、私の意思に反して泣く泣くこの手形を振り出す。だが、その一つは私にもどうしようもないのだ。つまり、私の命を失うか、それともこの手形を振り出すかなのだ」。それほど幸運でもない者たちはしばらく彼らを生き延びさせた酸っぱい食事を口にするか、もっといいものがないので今死んでしまうかだった。8月の毎日は、暑くて風通しがよくなかった。イースト・リバー⁵⁶の向こう側のニューヨークは、色とりどりのレンガでできた高い建物や、深紅のタイルの切り妻の

55 ロバートとトマスはいずれが年長か？ おそらくはロバートか？

ある屋根が並ぶオランダの運河沿いの町のように、こざっぱりして日当たりがよいところだった。食べ物匂い。丸石の上を行く車輪の音。子供達の泣き声。歩を進める女性たちの姿。ある者は夜になるとへさを滑り降りて、水泳したり水際で船を漕いで、この居住地^{Colony}の中に消え去り、この会社の船では2度と海に出ることはあるまいとか、ダリエンには絶対に戻らないし、そうしなければならないとしてもスコットランドには帰らないと、毒づく者もあった。

パターソンはユニコーン号から好意的な住まいに移された。彼が徐々にいわゆる彼の「狂気^{craziness}＜熱病＞」から回復するようになると、彼はナンファンに、書物に加えて、彼の「身につける衣服やリネン類、普通のリネンや日用品など」を海岸に持参する許可を申し出たが、彼がスコットランドへは別としてニューヨークを離れることはないとの約束をして、そうすることを許された。その他の人^{gentlemen}たちも、同じことを請け合い、一旦税関を通過した後に、彼らの小物類を与えられた。夜になると船団を放棄した者たち同様に、彼らの何人かは、スコットランドとこの会社と関係があったのだと快断した。

ロバート・ドラモンドの3週間が過ぎ、さらに2週間が過ぎた。船は言うに及ばず、大西洋の秋の強風のなかへ船を乗り出すのにふさわしい船員が手配された訳でもなかった。トマス・ドラモンドは、帰国への航海のためというよりも、もっと大胆な冒険を求めてソワソワしていた。彼には義務感というものがあって、彼をダリエンに戻そうとした。かつてそれは一抹の後悔もなくグレンコウでの小児をピストルで撃たせ、「われわれの任務を何とこころえる」との叫びで殺戮を叫ばせたように、それは今では彼を海賊行為に走らせた。彼はその兄弟とサミュエル・ヴィッチに、イースト・リバーにあった商館の一つの押収に同意す

56 ニューヨーク州南東部の水路：マンハッタン島とロングアイランド島との間にあって、ニューYork湾とロングアイランド水道とを結ぶ。

るよう説得した。その後彼はカレドニアに運び、救援が来るまで入植地を確保するつもりだった。

彼らが選んだ船は、至当と言うべきだが、アドヴェンチャー号と命名された。その船長、ジョン・ハウエル⁵⁷は、船をイースト・リバーへと、熱病で死亡したその乗組員の半数とともに9月9日までに運び、今や、操舵で、<p.212>船に補給することをナンファンに許可を求めて待機している状態であった。その船もスコットランド籍だったので、このことがドラモンドたちに、彼らの提案がある程度合法性があって、この会社法が、彼らに、彼らが欲するどのスコットランドの船でも、^{Company's Act}利用、^{take hold}係留、^{posses}所有する権限を与えるということを説得させたかも知れない。ハウエルは、カレドニア号の船上での晩餐に招待されたが、彼がやってきた時、彼はワインの一杯を与えられ、彼の所属する港湾を尋ねられた。彼の答えはグラーズゴウだった。「それでは、われわれの所属だ」、とロバート・ドラモンドが言って、「われわれは君を捕らえたから、君はわれわれの誇り<獲物>だ」。あまりに驚いたので返答も抗議もできなかったが、ハウエルは黙って、カレドニアの評議員会の署名が施され、彼の船が押収され、カレドニアの銃による支配下にあると宣言された、命令の朗読に耳を傾けた。

1名のボートの乗組員が、^{c u t l a s s}カットラスで武装して、オランダ人だった主ピーター・ヴェッセル⁵⁸には、船をカレドニア号の風下に運ぶように命じられていたアドヴェンチャー号へと姿を消した。顛顛にピストルを当てられていたにもかかわらず、彼は首を縦にはせず、スコットランド人たちは錨を揚げ、この船を停止させた。その次に彼らはヴェッセルを上陸させ、直ちに彼はナンファンの戸口に^{h a m m e r o n}押しつけられた。ハウエルは彼の船にロバート・ドラモンドによって乗船させられ、その船室に閉じ込

57 不詳

58 Peter Wessel 不詳

められ、^{drawn swords}抜き身を持った2名の兵士によって監視された。それから明け方になって、ドラモンドたちとヴェッチがいくぶん勇気を失い、ハウエルに使いを送り、この状況をどう考えるかと彼に尋ねた。彼が彼らと共に上陸し、彼がころよくスコットランド会社にその船を引き渡すか？ 承知した、と彼は言ったが、一旦上陸すると、彼は再び何ファンの保護を主張したのだった。

9月14日午前10時に、ドラモンドたちとヴェッチとが、フォート・ウィリアム・ヘンリーの^{Lieutenant-Governor}総督代理とニューヨーク評議会に召喚され、そこで彼らはハウエルとヴェッセルによって彼らに訴えられた嫌疑を否定した。サミュエル・ヴェッチは、すべてに対して^{deposition}供述書を作成し、誠にもっともらしい筆致で書かれていた。すべては誤解であった。彼らの名誉にかけて、その船を押収するような意図はさらさらなかったのだった。船の船長と操舵手が酒を飲み、夜間にその船がカレドニア号に衝突する危険があったので、アドヴェンチャー号を操縦をしたのだった。

「われわれと、われわれの想像の限り格別な敬意を払っております（そうすることがわれわれの義務ですが）政府とわれわれとの間の誤解に、ほんのわずかでも疑いがあるようなことが些かでも起こったようなことがあったとすれば、われわれは、この上もなく遺憾に存じます。」もしもハウエルとヴェッセルに対して、＜p.213＞なにか失礼なり、不注意な振る舞いがあったとすれば、それはカレドニア号の荒っぽい船乗りがやったことで、うそ偽りなく、誠実に署名を行った紳士たちによるものではありませんでした。

ウィリアム・パターソンは、この拍子抜けするような作り話への短いあとがきをもつるように説得された。悲しい（残念な）ことにこれは、彼の意思薄弱、彼の精神の苦悶、これ以上の不名誉からこの会社を救済したいという彼の願いからする恥辱を示唆するものであった。「私はこの場にはいなかったけれども、この供述に対して心から同意し、か

つ同感するものであります」。

ナンファンはそのいずれも信じなかった。彼はロバート・ドラモンドの一例を作らなかったが、この入植地の代理人には勇気づけられなかった。イライラさせる偶然の一致によって、その男もまたスコットランド人であった。「彼が言わんとすることはすべて」、とナンファンは後にベルモントに不平を述べた、「それは謀殺<重罪>に他ならなかったの

で、彼は残念に思ったことに、彼の同国人は非常に軽率で、私が彼にできる限り熱心に迫ったのだったが、どうすべきかとか何をすべきかに忠告は皆無であった。」彼は不承不承にではあったが、このスコットランド人による供述を受け入れ、この悪漢がカレドニア号から上陸するようなことがあれば、直ちにロバート・ドラモンドを逮捕すると約束をした。ドラモンドは賢明にも彼の船にとどまったのだった。

力によって一隻の船を押収する試みに敗れて、ドラモンドたちは、別のものをずっと周到に獲得することに決めた。彼らは、ニューヨークの2人の富裕な商人たち、スティーブン・デランシーとトマス・ウェナムによって助けられ、その二人は、アドヴェンチャー号への急襲によって特に夢中になったが、彼らの現在ならまずまずの財産^{fortunes}の基礎は、彼らが昔財政的な援助^{f i n a n c e d}を与えたマダガスカル^{Madagascar}の海賊たちによって基礎が与えられたのだった。彼らは、一隻のスループ船アナ号をスコットランド人たちに喜んで提供し、カレドニアに戻るための必需品や食糧を船のために整えたが、船の行き先はもちろんのことだが、ニューヨークでは公けにできなかった。その代わり、スコットランド人たちは、担保^{security}として彼らの交易品の大部分を水揚げするのに同意した。これらの持ち主は変わらなかったが、会社の従者の監視^{c a r e}のもとある倉庫に留められたので、デランシーやウェナム<ヴェンマン>が、あの布告を破って援助を提供したことをナンファンが証明するのは難しかった。唯一の非合法的行為とは、しかるべき許可^{clearance}もなくアナ号<>が出発することであった。

船は、9月20日、金曜日の日没後、静かに係留を外し、カレドニアのアンという新たな名前前で、国王の役人たちがそれを見ている前で、＜p.214＞イースト・リヴァーから姿を消した。船の委任状^{commission}は1週間以上トマス・ドラモンドのポケットの中にあっし、ロバート・ドラモンドの乗組みの一団がアドヴェンチャー号に漕ぎ去る間に、ヴェッチや力なく黙認したパターソンの署名も済んでいた。彼＜トマス・ドラモンド？＞は、南に帆走して、確かにスコットランドを出発したに相違ない救援の遠征隊を見つけるはずで、さらに「われわれの状況や、港湾と上陸の両面に関する、環境と状態を」それに知らせる予定であった。そのスループ船の船長は、アリグザンダ・ステュアートで、彼は、「貴殿が返答できるであろうあらゆる点につき、言われるところのトマス・ドラモンドに厳格かつ正確に従う」ことを命じられていた。

ドラモンドがあらかじめ同行に選考していた少数の陸上要員^{landsmen}たちは、すべてが若く、勇敢で、病気の気配はなかった。そのいく人かはアーガイル＜連隊＞で彼と共に従軍しており、彼の指導には熱烈なほど忠実であった。彼らは自らの撤収に屈辱をもって憤慨し、彼らの祖国の名誉や自分たちの自尊心を取り戻すことを切望していた。ロバート・ターンブルは、そこから離れたことであのダリエンの緑の大地に対する彼の愛情が一層激しくなっており、最初に提案^{venture}があつて以来、この企てに対する意欲に燃えていたが、またしても彼は後方にとどまることになった。あのスループ船が出発した時、彼は友人たちと共に、スターテン諸島⁵⁹に滞在しており、彼は一隻の小さなボートのなかで一晩中、彼がそれに追いつくまで、船の船尾ランタンを追っていた。彼の住居の中に彼は小さな金の塊、かつてはインディアン⁵⁹の女性が身に纏って言いた一枚の鼻板や、カレドニアからの恐るべき航海の間どうしたものか生きのびた一羽

59 ニューヨークのスターテン湾南方、ニューYork湾に臨む島。

の素晴らしい鸚鵡を残した。彼の望みは、ロバート・ドラモンドがこの種のささやかな贈り物をスコットランドまで運んで、カーノックのアースキンにそれを渡してくれることであつた。

ナンファンがスループ船の出発を耳にした時、恐怖とイライラの中でベルモントに手紙を書いていた。「カレドニア人たちは、彼らの同国人たちの忠告や助成によって、公平ならざることをわれわれに行なつた」。これが彼の言い得たすべてで、アドヴェンチャー号やアナ号についてかの伯爵に報告する勇氣はなかつた。ベルモントはこの言い紛らわしangeredを怒って＜腹を立て＞、これはナンファンが日頃その速達便で書き送つたことの10倍以上に確かに重要なことだと指摘した。この長官Governorは、ここにいうるさいスコットランド人たちがすべてがいなくなるのをよしとしただろうが、彼はそのブツブツ漏らす部下subordinateたちにも些かの同情もしていなかつた。「俺は、彼らと共にお前たちの指も燃やして、俺がお前たちに送つた國務大臣からの指示も引き破らなかつたならばと思う。」＜p.215＞ロバート・ドラモンドは帰国に出発する準備ができていた。毎日彼は死亡や逃亡によって部下たちを失い、ヴェッチがナンファンに、逃亡者たちの逮捕に手助けを求めてはいたが、この副総督Lieutenant-Governorはケチ臭くてお手上げ状態であつた。今となつては、両船＜アドヴェンチャーとアン号＞が大西洋を渡れるなど考えるのは望み薄だったが、9月の終わりにユニコーン号が航路を外れて、ジャージー海岸のパーサアンボイPert h A m b o yに着いた。そこでその船は放棄され、ゆっくりと朽ち、略奪者たちによって解体され、木材は霜や太陽によってバラバラになつただろう。その船の乗組員や乗客たちの惨めな生き残りが一旦カレドニア号に乗り込むと、ドラモンドは、出発に向けて最善を尽くしてその準備を整えた。ベルモントの指導により、ナンファンは、彼が10週間分の食料を調達するのを認め、彼はこれさえあれば、彼がクライドに到達するのに過不足なしだとの希望を持った。

この生き残りたちは、彼らがスコットランドで受けるはずの歓迎のことを考え始めたが、それによって彼らの誰ひとりホッとなった訳ではなかった。ロジャ・オズワルドは、ついに自らの父親に手紙を書く勇気を見出した。ジェイムズ卿は、彼がニューヨークで振り出した21ポンド・スターリングの手形に気がついたが、神がご照覧としても、それは必要なことであった。食べ物がない場合でも、船医は生きるためには彼にはわずか2日分しか提示しなかった。彼がスコットランドに到達しても、自分の家に帰ることはなかった。彼はグラズゴウのステイブル・グリーン・ポートの脇で寡婦フィンレイトと共に住う予定だったが、彼の父親の寛大への希望を持ち、そこにとどまった。「私に対してあなたがお怒りになる十分な理由があるのは承知しております。しかし閣下＜あなた＞、私があなたと別れて以来、どんな苦難に私が耐えてきたかがお分かりになれば、いく分なりともあなたは私のことをお許しになるのではないかと存じます……………」。

カレドニア号が出発する数日前に、サミュエル・ヴェッチがパターソンに、ニューヨークに滞在することを告げた。「彼は私に、この冬そこに滞在するつもりだから、しばらくたてば、^{We h a m D e l a n c y}ヴェナムやデランシーに償いをするために上陸した結果を見届けるから、^{look after}そのために彼がこの植民地に戻ってくるのに備えよう。」。パターソンは、この提案を否定したが、彼が残される唯一の評議員たちだったので、この人物の決定に影響を及ぼす力は彼にはなかった。

哀れみが最良の政策であると、ヴェッチは彼の兄弟のウィリアムに書いたが、加えて、心底からの正直が名誉をうる最高の方法である、と。彼はそれに以下のように付け加えることもできた、つまり、機会を大胆に捉え、賢明に使うことが、成功する最も確実な方法だと。この瞬間においても、その利益が彼の役に立つ間彼がこの会社に奉仕する用意があったとしても、彼がカレドニアに戻ってくる意図は皆無であったのに

はまず間違いはない。＜p.216＞彼はニューイングランドを見物し、細部にわたって彼が見聞したことに好意を持っていた。一面では結婚を通じた彼の従兄弟、マーガレット・リヴィングストンがいる。彼女の父親、ロバート・リヴィングストンは、ニューヨークで最も有力なスコットランド人の一人で、ハドスン川の東堤に広大な土地と、婚姻とヴァン・コートランズ、ヴァン・レンセラー、デランシー家のような影響力ある家族との縁故のある商館を所有していた。スコットランドの船団が到着し、カレドニア号の出発に食料を調達した時、スコットランドに信用を供与したのは、リヴィングストンであった。彼がこのことを金儲けのために行ったとしても、同時に彼は、それを、ベルモントの政敵としての彼の義務であり、ダリエンのために働いたあの姻戚達に対する道徳的な義務だともみなしていたのだった。彼らの一人が、甥のアンドルー・リヴィングストンで、ドルフィン号の船医であった。

ヴェッチが十人並みで、鼻の尖った従姉妹と結婚した時、彼女の父親は、二人にパールストリートの家を一軒と土地を一区画を与えたが、天井が高く、2本の煙突のある素晴らしい邸宅は、1000ポンドの値うちだと言われた。ヴェッチは商人として事業を開始し、その後この会社は彼の手に残された財産に何が起こったかは誰にも分からなかったが、彼がヴェトナムとでランシーの助力を得てそれを彼自身の利用に供したと推定された。母国の同郷人たちからの憎悪や不満、カレドニアから彼と共に出帆した人々の憎しみ、彼の家族の激しい苦痛があっても、彼は少なくとも公には困ることはなかった。彼は成功して、豊かで勢力ある、ミリシアの大佐兼ノヴァ・スコシアの総督となり、彼の野望が彼の才能を上回るにまで至って、かつては彼の友人たちであった政敵たちによって没落させられた。彼はイングランドに逃れた。彼がこの会社とその同僚たちを見捨てて33年後、彼は国王のベンチ監獄で寂しい債務者としてこの世を去ったのだった。

カレドニア号は、10月12日に出発した。15カ月前にフォースの港を離れた5隻の船の中で、この船だけがスコットランドに戻った。船は少なくとも300名を運んだが、そのいくらかは船がクライド川に到着する前にこの世を去った。

＜第3章終わり、第4章「宇宙への鍵」に続く＞

